

293

2022 秋号

施設設計を考える ②

教育施設の今、これから

ひろば

第1回かながわ・けんちく・アカデミー2022

覗いてみました他人の流儀

海外レポート

各支部活動報告 北海道支部

未来へ継承したい風景

良質な建築、これからのまちづくり

連載：弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第2回

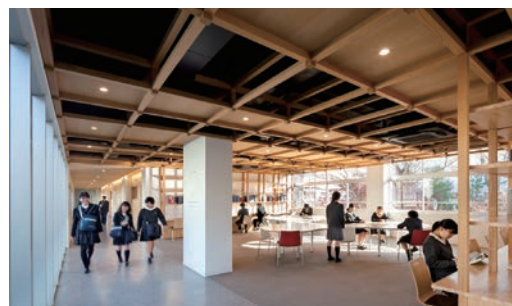
温故知新

活動報告

建築ウォームアップ

卒業設計をふりかえる

学生の会 @ joint 活動報告





自動ドアの無駄な開閉・開放を削減し 室内環境の改善と省エネに貢献

ナブコシステム株式会社は、1957（昭和32）年、ナブテスコ株式会社（旧日本エアーブレーキ株式会社）が自動扉開閉装置（ナブコ自動ドア）を発売する際に、その販売と取り付け業務を請け負う東日本地区の総代理店として発足しました。事業の中心である自動ドアは全国で50%以上のシェアを誇り、年間約4万台を設置。施工やメンテナンスも手掛けています。また、ステンレス建具や海外商品の高速シャッタードア、スタッキングドアなども幅広く取り扱っています。内田正則社長に最新の自動ドアの技術や、環境に配慮した取り組みについてうかがいました。

安全・安心・快適な 自動ドアを目指して

当社は、ナブコ自動ドアの販売代理店です。自動ドアの販売・設計・施工からメンテナンスまでを中心に行い、同時にドアまわりのステンレス建具の製造や、シャッターなど海外商品も取り扱っています。設置場所は、オフィス、店舗、マンション、病院、工場など幅広く、動物園や空港、駅など特殊な施設のドアにも高い技術力と施工ノウハウで柔軟に対応しています。

安全・安心にドアをご利用いただくために、自動ドアは安全規格「JIS A 4722」にも対応した製品を提供しています。戸袋に手などが引き込まれてしまうことを防ぐ防護柵は、今では設置が当たり前になってきましたが、このような安全対策のための製品も多数展開しており、新規はもちろん既存ドアにも取り付けることができます。

コロナ禍の今は、手で触れたりして開けるタイプの自動ドアをセンサーでの完全自動化に変更したり、建物の中を区画分けするために自動ドアを採用いただいたり、マンション改修時にエントランスの開き扉を自動ドアに変更するケースも増えています。

進化する自動ドアの技術 センサーで人の動きを検出

自動ドアは、引き戸や二重引き戸、円形戸などさまざまなタイプがあり、それぞれ多様なラインナップをご用意しています。中でも「NATRUS」シリーズ



安全性・快適性・耐久性に優れた、未来標準の自動ドア「NATRUS」

ズは、安全規格「JIS A 4722」に対応し、通信システムで故障をすぐに検出できる機能を備えた、安全性・快適性・耐久性に優れた商品です。

これに専用の制御器を追加したものが「NATRUS⁺e」。72個のスポットで人が扉に向かって歩いているのか、横切っているだけなのかを感知し、不要な開閉や開放を少なくして空調効率向上に寄与します。

これまで無駄な開閉を避けるためにタッチ式自動ドアが設置されてきましたが、車椅子利用時などには操作が大変で、逆にご不便な状況を生み出していました。ですがこの「NATRUS⁺e」なら、タッチ操作も不要でバリアフリーと省エネの両方を実現できます。

車両衝突対応型ボラードなど 海外商品も多数販売

ユーテックドアと呼ばれる、ドイツ製の高速で開くシャッタードアやスタッキングドアなど、工場や物流施設向けのドアも販売しています。

また、開口部や通路に車両が衝突し、建物や設備などが破損することを防ぐボラードも取り扱っています。ベルギー製で、万一衝突しても素材の柔軟性により衝撃を吸収。樹脂製なので傷がついても色は変わりません。商品自体は目立つように黄色ですが、カッティングシートを貼って設置場所のデザインに合わせることも可能です。建物の入り口まわりや、運搬用開口部などにぜひご検討ください。



ナブコシステム株式会社

<https://www.nabcosystem.co.jp>

ナブコ自動ドア、ナブコ自動回転ドアの販売、設計、施工、メンテナンス。ステンレスサッシ・建築金物全般の製造、海外商品のシャッタードア・シートドア、ボラードなども販売しています。

本社 東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビルディング32F
TEL: 03-3591-6411 (大代表)

■宮城県栗原市にある「くりこま工場」にはショールームも併設しています。

目次

支部長退任・新任挨拶

- 4 2年間を振り返り アトリエ慶野正司 一級建築士事務所 慶野正司
5 本年度の活動方針 大宇根建築設計事務所 渡邊太海

● 特集

6 施設設計を考える Ⅱ

教育施設の今、これから

- 6 地域コミュニティ スクール・コミュニティ (SC) への誘い
スクール・コミュニティ研究会・秋津コミュニティ 岸 裕司
8 小・中学校建築 既存校舎を生かした2つの事例から 大宇根建築設計事務所 宮地洋樹
10 高等学校建築 使いながら更新し続ける学校づくり SALHAUS 桒澤麻利

● ひろば

- 13 第1回 かながわ・けんちく・アカデミー2022 地元に未来を託す建築家像のあり方
アーキテクトカフェ・田井幹夫建築設計事務所 田井幹夫
14 interview: 覗いてみました他人の流儀 藤本明義氏に聞く 上手に伝えられるのがプロのマジシャン Bulletin編集WG
16 海外レポート マドリッド発「旅日記」
—国際建築家連合 (UIA) フォーラム《Affordable Housing Activation》に参加して— OSA ジャパン 坂田 泉
18 各支部活動報告 北海道支部「北海道の建築展2022」 ヒココニシアーキテクチャ 小西彦仁
20 未来へ継承したい風景 重層する都市景観の視点と課題 一千代田地域会の景観活動— 桐原武志
22 良質な建築、これからのまちづくり 自ら事業主となり、暮らしと街に働きかける 日吉坂事務所 實神尚史
23 連載：弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第2回 リフォーム設計で気を付けるべきこと
山崎哲法律事務所 安藤 亮
24 温故知新 秋草の庭 堀口捨己先生へ HASAS 篠田義男建築研究所 篠田義男
25 抱負を語る 施主について考えてみた アルキテック設計室 鈴木 晋
抱負を語る 地域社会における建築とは 永峰総合計画事務所 永峰麻衣子
26 活動報告 交流委員会 Aグループ 親睦ゴルフコンペを開催 前田製管 大島寛隆
27 交流委員会 Cグループ 「建物見学会」など交流活動の再開を願う フッコー 杉山成明
28 建築ウォームアップ —建築のはじまりかたを探る— 信頼からつくる建築 HIRO 建築工房 伊藤昭博
29 卒業設計をふりかえる 筋書きのないドラマの始まり Field Design Architects 井上雅宏
30 学生の会 @joint 活動報告 建築を楽しめる場を目指して 日本大学大学院理工学研究科 長谷川理奈

● あとがき

- 31 ひといき 器の愉しみ フクシアンドフクシ建築事務所 福士 譲
31 編集後記
2 パートナーズアイ ナブコシステム株式会社 自動ドアの無駄な開閉・開放を削減し 室内環境の改善と省エネに貢献

表紙画像：上、「横浜高等学校」(設計 SALHAUS) コモンルーム (撮影 吉田誠) / 中、秋津小学校の手づくりピオトープ (提供 岸 裕司) / 下、「大崎学園」(設計 大宇根建築設計事務所) 吹抜けの大階段

2年間を振り返り



関東甲信越支部
前支部長
慶野正司

縁があり2020～2021年度の関東甲信越支部支部長を拝命し、2年間務めてまいりました。就任にあたり確認すると東京、神奈川以外の県地域会所属会員の支部長は初めてとのことでした。それまで支部・本部活動に7年間ほど参加していたこともあり、JIAの現状や抱えている課題は多少なりとも把握していましたので、前任者からの引き継ぎのつもりでお引き受けしたものです。しかしながら、全JIA会員の約半数が所属している巨大な支部です。就任日が近づくにつれその重責をヒシヒシと感じながら準備を進めていました。しかも栃木県在住在職でありながら支部長職遂行は困難を極めると覚悟をしたことも思い出します。当初、執行部の皆さまには地理的なことがあり、それまでJIA内で活用が充分に進んでいないオンライン会議を積極的に多用する旨、お願いしておりました。しかし、結果的にはコロナ禍でオンライン化せざるを得ない状況になったわけです。

2020年5月、支部長に就任したのは新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の真只中、社会では行動変容が求められ、それまでの慣例や常識さえも覆しながら過去経験のない社会生活を余儀なくされました。そもそも支部運営は従前通りで淡々と……、との思いでおりましたが、全ての活動・運営形態を一から検討しなければならなくなりました。まず取り掛かったのはコロナ感染拡大状況に即した指針として「活動ガイドライン」の作成と共有、そしてオンライン活動のための環境整備です。まさに社会が目指していたオンライン化社会が一足飛びにやってきたのです。さらに、コロナ禍が社会に強いたのはそれだけではなく、人々の価値観やライフスタイルを変え生活構造やビジネスモデルも変容させてきました。これらは言うまでもなく今後の都市変容・建築変容に直結するものであり、携わる私たち建築家の社会的職責も変化への対応が求められ、建築家職能を見つめ直す機会といえます。そのような社会背景においてJIAは、本部・支部・地域会において横断的に課題や意思を共有しつつ、さらに順応性の高い活動と運営で臨まなければならないと考えます。さらに、地球的課題としてSDGsの推進、カーボンニュートラルの達成など持続可能な社会づくりへ向けて建築家

の役割が多いことも強く認識しなければなりません。

支部内の2年間の活動に目をやると、23地域会、16委員会、11部会、3支部事業の活動体はコロナ禍において中止・延期を余儀なくされた事業も数ある中、オンライン開催など工夫しながらJIAの公益活動を推進し、当初の計画通りとはいかないまでも数々の成果を上げられました。また私たちは2年間のオンライン活動によりその有能性も学習し、今後の効果的な活動形態を見通すことができました。その他、重点活動として支部内の情報共有と交流の強化、学生会員の拡大と組織化、そしてオンライン配信の環境整備など執行部を中心に推進し、次に繋ぐ活動ができたものと思います。

振り返ると尽きませんが、こうして無事に退任する今日を迎えられたのは、言うまでもなく支部役員の皆さま、支部会員の皆さまのご理解とご協力そして何よりも活動への熱意があつてのものと敬意と感謝を申し上げます。私にとっては、大変重荷を背負って歩んできた2年間ですが、多くの方々と触れ合い、議論し、勉強する機会をいただき、自らの成長をも感じる事ができた貴重な時間となりました。

本年、会長・支部長とも交代し新体制で運営がスタートいたしました。会員の皆さまに於かれましては引き続き「社会に求められるJIA、社会に頼られる建築家」を目指してご活躍されますようご祈念申し上げます。

2年間、ありがとうございました。



支部会員集会后に六鹿正治会長、佐藤尚巳新会長と

本年度の活動方針



関東甲信越支部
支部長
渡邊 太海

このたび、日本建築家協会 関東甲信越支部支部長に就任しました渡邊^{ふとみ}太海です。私は1988年に大宇根建築設計事務所に入社しました。JIA活動に参加するようになってからは10年足らずですが、大宇根弘司が第7代会長を務める様子を側で見ながら、日々勉強し精進してまいりました。

JIAはこれまで多くの活動を通じて、建築家の地位向上に努めてきました。業務報酬、設計契約、設計者選定など業務環境の改善の取り組みや、建築家資格制度の確立のための活動など、議論を重ね一步一步前進してきました。現在では、建築家の業務内容の多様化や新たな発注方式、急速に進む設計環境のデジタル化やウィズコロナ社会への対応、さらに学生の建築家志望減少など新たな課題にも直面しています。私たちは、建築家を取り巻く厳しい環境を認識し、解決に向けて積極的に取り組む必要があります。

また、地球環境問題に対応する建築のありようを具体的に示す必要に迫られ、SDGsへの取り組みなど建築家の責任はますます重くなっています。築40年足らずで建物が取り壊される経済重視の社会風潮に対し、まちづくりや社会資源の大切さなど、建築家が社会に向けて声を上げる必要性も求められているといえます。

私たちはこうした状況を認識し、社会に貢献する建築家として、その責任を確実に果たすことのできる環境を築くために、「魅力あるJIA・行動するJIA」を目指し、活動していかなければなりません。その目標を達成するため、2022年度関東甲信越支部の活動計画として以下の3つを掲げました。

1. JIA活動の活性化と社会への発信を推進します。

国民が設計の専門家(建築家)に安心して仕事を任せられるようにするため、建築家の役割や存在価値を社会に発信します。

- ①建築家資格制度の検討
- ②まちづくり、保存、災害対策、環境など社会公益活動の推進
- ③学生会員・若手会員のフォローおよび活動ステージの整備
- ④多彩な手段による戦略的広報の展開

2. 建築家の職能及び資質の向上を推進します。

建築家が能力を十分に発揮できる環境をつくり、職能の確立を目指します。

- ①業務環境の改善(設計監理報酬、設計監理契約、BIM、著作権など)

- ②知的生産者の公共調達の法改正への取り組み

- ③設計監理業務における発注者支援の取り組み

3. 建築家が社会貢献しやすい組織づくりを推進します。

建築家が共に研鑽し、交流する場を整え、安定した継続体制を目指します。

- ①委員長会議・地域サミットの合同会議などでの交流

- ②法人協力会員主催のオンラインセミナーの開催

- ③オンライン・プラットフォームを活用したウィズコロナでの活動方法の検討

- ④会員増強と会員減少に耐える財政体制の検討

- ⑤JIA活動における収益事業の模索

この中で本年度の活動の主眼に置きたいのが、「1. JIA活動の活性化と社会への発信」です。そのための重要課題が建築家資格制度の検討であると考えます。JIAのHPに以下の掲載があります。<http://www.jia.or.jp/activity/about.html>

「JIAの10の活動」 10. 登録建築家の認定活動

現在の建築士制度は、国民の利益を守り、美しく安全で快適な環境をつくるという建築家が果たさなければならない本来の機能を果たしていません。こうした機能を改善するために、「建築家」資格制度が必要です。国民が設計の専門家(建築家)に安心して仕事を任せられるようにするために、すぐれた設計能力を備え責任感と倫理観をもつ建築家を認定する、登録建築家の認定活動を行っています。

多くの会員から「登録建築家」とJIAの正会員は何が違うのか、「建築家資格制度」とは何か、などと聞かれます。昨年度、本部でも「建築家資格制度」を議論するためのWGが設置され、現在の「建築家資格制度」(登録建築家制度)を今後どうするのかといった問題をはじめ、会員間の議論を活発にする必要があるとの提言がありました。関東甲信越支部としてもこれらの制度がつくられた理念である「国民が設計の専門家(建築家)に安心して仕事を任せられるようにするため、建築家の役割や存在価値を社会に発信する」ことを再確認し議論を深めていきたいと考えています。

皆さまのご指導ご鞭撻よろしくお願いいたします。

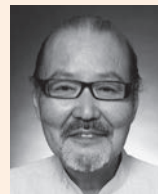
教育施設の今、これから

地域コミュニティ

スクール・コミュニティ (SC) への誘い

— 学校校舎内を含めた施設開放による地域育て —

スクール・コミュニティ研究会・
秋津コミュニティ
岸 裕司



公立学校は年間約200日の開校に対し、学校施設は365日住民の傍らにある。工夫次第で住民開放が可能である。私に関わってきた習志野市立秋津小学校は、教室4室と畑用敷地、陶芸窯の3つのハード施設を秋津小学校コミュニティルームの名称で開放し、放課後や休日子どもも大人も集い学び合う生涯学習を推進する(広義の学社融合)。施設の鍵も住民委員が持ち、年間延べ1万3千人が利用する。開校日は住民との授業や行事を協働(狭義の学社融合)する。運営ソフトは1995年に住民で組織した秋津コミュニティである。そこで本稿は、学校と住民協働のソフトとハードの施設を開放する学校複合化のあり方・考え方を国の最新施策とともに述べる。

コミュニティ・スクール(CS)と スクール・コミュニティ(SC)の違い

今、国・文部科学省は、「地域とともにある学校」と称して、通称コミュニティ・スクール(CS)と呼ぶ学校運営協議会と地域学校協働活動を推進する。CS校は、全国の学校のうち33.3%の11,856校に上る(2021年11月、文部科学省)。2004年改定法に則ったCS最大の特徴は、保護者や住民代表のCS委員は地方公務員特別職となり「校長が作成する学校運営の基本方針の承認をする」ことである。つまり、委員は承認するまで校長に書き直させる権限と責任をもつのである。だから、CS制度によって1872(明治5)年の学制以来134年にして市民が学校運営に関与できる権限と責任を初めて法により与えられたのである。その意味では、学校と市民が真に協働し、学校・子ども・まちを一体で育む市民運動となる画期的な施策がCS制度と考える。他にも「学校運営について、教育委員会又は校長に意見を述べるができる」と「教職員の任用に関して、教育委員会規則に定める事項について、教育委員会に意見を述べるができる」がある。

一方、私が名付けたスクール・コミュニティ(SC)の単語を公表したのは、2005年10月に出版した拙著『中



秋津小学校のスクール・コミュニティを文字化した看板
校舎1階の秋津コミュニティ出入口

高年パワーが学校とまちをつくる』(岩波書店)である。SCをこのように定義した。

「スクール・コミュニティは、学校運営への参加や教職員の任用にも意見を述べるができるだけではなく、授業の校区住民との協働と、学校施設の校区住民との共用や全面開放をふくめて推進することにより、学校はもちろんのこと、校区全体を学びのコミュニティにまで高めることを主眼にしている。」

CS制度開始の翌年に出版したのは、SCはCSの上位概念と認識していたからである。SCの具体像を以下のように記した。

「●自助・共助、最後に公助のまち育て

秋津小学校と校区住民とのさまざまな交流経験から、私は学校にはもともと校区の誰でもを呼びこめる、2つの機能があるのではないかと、思うのである。

第1に『学ぶ』機能。この『学ぶ』機能を意図的に拡大させて、『融合の発想』にもとづき学校と住民とをつなぎ、子どもと大人がともに学べるように意図して仕組む『学社融合』により生涯学習の校区にまでたかめていける機能である。

第2に『施設』機能。学校施設の開放は、一般的には校庭と体育館のみがほとんどだろうが、これからは秋津小学校コミュニティルームのように、校舎内の諸施設の開放も校区のさまざまなひとががつどい学び交流することによるコミュニティ活動活性化の拠点施設としての『まち育て』の観点からは、重要な行政施策になってくだろうと予想する。

この『2つの学校機能の開放』の過程では、秋津のもっとも大切な運営法としてのキーワード『できる人が、できるときに、無理なく、楽しく!』が生まれた。とかく学校は、教職員も住民も固くなりがちで『できない人が、できないときに、無理して、楽しくなくなること』が多いことから、逆の

●秋津小学校のスクール・コミュニティで実践してきた一例



住民参加の学校と地域の合同運動会



休日開催のうどんづくり教室



校庭にテントの花が咲く。防災被災訓練を兼ねた1泊キャンプ



東日本大震災時に避難してきたお年寄りを兼ねた1泊キャンプ



下枝を刈りスケスケにして校庭安全



住民自治の総合型スポーツクラブNBS女子サッカー



手づくりピオトープ・休日の賑わい



ピオトープ横にテーブルとベンチづくり

発想での参加の理念としてこのキーワードが生まれたのである。そして自分の子どもは卒業しても、楽しいことから『卒業しない大人』が増えるにしたい『自助・共助、最後に公助のまち育て』との、ひとり一人が主人公になっての主体的な自治意識までが醸成されてきたと思うのである。」

つまり、SCは「学ぶ＝ソフト」と「施設＝ハード」の「2つの学校機能の協働」により住民自治力が醸成されての民主的な「自助・共助、最後に公助のまち育て」を意図する実践である。そして、2010年にNPO日本教育再興連盟(河村建夫会長)より「スクール・コミュニティの草分け」として「日本教育再興連盟賞」を授賞した。このSCを、国の「地域とともにある学校」の先のあり方として、私は「学校とともにある地域」と名付けた。

スクール・コミュニティの単語の公的最初と意味

そして、2015年に教育再生実行会議第6次提言で、スクール・コミュニティの単語が公的に初めて括弧付きながら以下のように公表された。

「全ての学校において住民や保護者等が学校運営に参画するコミュニティ・スクール化を図り、地域との連携・協働体制を構築し、学校を核とした地域づくり(スクール・コミュニティ)への発展を目指すことが重要です。その際には学校教育と社会教育が一体となったまちづくりの視点も重要です。地域コミュニティの拠点としての学校の間を活用して、子供への教育のほか、地域住民の生涯学習や健康、福祉等に関する機能をも集積していくことが考えられる。」

提言は、私のSCの定義とそっくりである。むしろ、秋津モデルを教育再生実行会議が取り入れたと考える。また秋津実践の「学社融合」と、提言での「学校教育と社会教育が一体となったまちづくり」は同じ概念である。そして、2017年に「地域学校協働活動」と「地域学校協働活動推進員」が、社会教育法に新設されたのである。

学校複合化のためのソフトとハードのあり方・考え方

今学校は、建て替え時期にきている。そこで、「学ぶ＝ソフト」と「施設＝ハード」を少子高齢化の緩和や住民の生涯学習活動の拠点とする複合学校のあり方・考え方を秋津コミュニティの実践から述べる。

- ・ 特別教室は別棟または1階に集約する。その際、バリアフリーと中高層棟であればエレベーターや冷暖房も完備する。
- ・ 動線は、子どもと住民の出会いを意図して一体となるように確保する。
- ・ 鍵は、利用者団体を組織して預ける。災害時の避難が住民自治で可能になるからでもある。
- ・ 開放部の管理責任者は、教職員と切り離し教育長または首長部局に移管する。
- ・ 学年室は設けない。全員が集まる職員室が先生のコミュニケーション不足の抑止になる。
- ・ 校庭の見通し確保のために生垣にし、下枝は刈り取る。
- ・ 市民農園や果樹園なども設置する。住民が訪れ「学校の安全確保」にも寄与するからである。
- ・ 安全確保から駐車場は設けない。通勤を徒歩やバスなどでもらうことで、勤務校区の住民との出会いを意図的につくり、住区の様子を知ってもらうためである。一部の自治体では教職員から駐車料金を徴収している例もある。
- ・ 住民が自主運営する「総合型地域スポーツクラブ」の道具を収める住民用の体育倉庫を設ける。
- ・ 学校給食は、住民誰もが食することができる「地域の総合給食センター」にすると良い。

以上は、拙著『学校開放でまち育て～サステイナブルタウンをめざして～』(学芸出版社、2008年)よりの要約。

私は文部科学省から委嘱されたコミュニティ・スクールマイスターとして全国に派遣されてCSの推進に勤しんでいる。その際、「CSの先のSCを目指そう!」と話す。CSの設置は目的ではなく、その先の誰もが生涯学び合い安心して暮らせる楽しいまち育てのSCを目指してほしいからである。

小・中学校建築

既存校舎を生かした 2つの事例から

大宇根建築設計事務所
宮地洋樹



小・中学校建築を設計しながら考えること

昨今の小中学校の計画では主体的に学べる学習環境の整備やICT化への対応、災害・防犯対策等、時代の要請に応じたさまざまな配慮が求められる。当然、最新の知見をもとにそれらへの対応を行うのだが、それだけでよい学校ができるわけではない。

小中学校はそれぞれの地域において最も身近な公共施設の1つであり、さまざまな行事を通し、世代を超えて記憶が受け継がれていく大切な場所だ。校舎の姿はその地域の風景を形づくる重要な要素でもある。それがたかだか40～50年程度であっさり建て替えられてしまうことにとっても違和感を覚えるし、旧校舎解体前のお別れ会に卒業生らが集まって当時を懐かしむ姿を目にするのは何とも寂しく、そのような状況は何とかしたい。

そのためには校舎を長寿命かつ省エネで、何よりも児童生徒や住民にいつまでも愛着を持って使い続けてもらえる魅力ある建築として実現することが大事だとつくづく感じている。限られた予算をやり繰りしてレンガや無垢の木を用い、外断熱や自然エネルギー利用にもこだわり、子どもたちや住民を巻き込みながら、魅力的な校舎づくりの悪戦苦闘が尽きない所以だ。

近年では新築や改築だけに限らず、比較的まとまった規模の既存改修によって、学習環境の改善や長寿命化、省エネ化に取り組むケースも少なくない。ここではそのような改修計画を含む、既存校舎を生かした2つの事例について紹介する。



大崎学園 増築した新校舎(左)と既存小学校校舎(右)

三條市立大崎学園

既存小学校校舎を活用した義務教育学校

新潟県三条市は市内全ての公立小中学校で小中一貫教育に取り組んでいる。この大崎学園は既存の小学校の敷地を拡張し、そこに同じ学区にある中学校の校舎を移転・増築して、新たな小中一貫の義務教育学校として生まれ変わらせたものだ。設計者の選定は公募のプロポーザルにより行われた。

小中一貫校の計画では児童生徒が9年間という長い期間を有意義に充実して過ごすためにどのような空間づくりを行うかが課題となるが、それには全校児童生徒が日常的に幅広く交流できる場をできるだけ数多く用意することが有効だ。ここでは既存の小学校校舎と増築する新校舎の間に、全学年が利用する昇降口やクラスルームへの主動線となる吹抜けの大階段、学校の歴史や児童生徒の活動を展示するギャラリー、小中一体の学校図書館等を配置し、これらを中心に児童生徒たちが毎日顔を合わせ、自然に交流できる構成とした。

クラスルームは既存校舎も含めて1年生から9年生まで学年ごとのまとまりを整え、それぞれに多目的学習スペースや学習室を確保して、学年単位で連携して柔軟に学習環境を得られるつくりとした。新校舎は特別教室を関連教科ごとにまとめ、準備室に面して各教科の展示コーナーを設けている。小学校校舎は元の職員室や図書室を多目的教室に改修し、昇降口だった広いスペースは児童の作品展示スペースとした。

職員室はアプローチに面した新校舎の1階にまとめ、



大崎学園 主動線となる吹抜けの大階段



横瀬小学校 町民に親しまれている築89年の木造の第1校舎



横瀬小学校 この春に1期工事を終え、現在2期工事が進む

小中の教員が学校全体に目を行き届かせやすく、相互の連携も図りやすくしている。新校舎には学童クラブや地域の交流スペースも設けているが、それぞれに専用の玄関を用意し、活動に応じて利用エリアを区画できるつくりとして、放課後や休日の単独利用を可能にしている。

新校舎は全体に外断熱を施し、太陽光発電やクール＆ヒートチューブによる地中熱利用、雨水利用等を取り入れたエコスクールとした。既存校舎は防水や外装をリニューアルして長寿命化するとともに、屋上の断熱強化やペアガラスサッシへの交換等、環境性能の向上と省エネ化を図っている。

横瀬町立横瀬小学校

シンボルの木造校舎を残した学校改築

埼玉県横瀬町の横瀬小学校は現在、町に唯一の小学校であり、多くの町民にとって母校であると同時に自分の子や孫が通う学校として親しまれている。前身の横瀬学校は明治5年に開設され、明治33年に現在の場所に移転後、児童数の増加等により幾度か増改築が行われてきたが、昭和8年に建てられた木造の第1校舎はその後も大切に受け継がれ、今では町のシンボルとして愛されている。

この第1校舎の後に建設された鉄筋コンクリート造の校舎2棟の老朽化が進み、今回それらを建て替えることとなったが、木造の第1校舎はそのまま残し、小学校教育6年間のうち1年間でそこで過ごすことが設計の条件とされた。こちらも設計者選定は公募のプロポーザルによるものだ。

昨今の公共施設の設計は利用者や地域住民等の参加が欠かせないが、ここでも保護者や学校運営を支援する町民らが加わる検討委員会で意見交換を行いながら設計が進められた。プロポーザル時の提案である第1校舎を中央に据えた校舎レイアウトを基本とし、新校舎を第1校舎に倣って全て2階建てとすることで最終案をまとめた。

新校舎には5学年分のクラスルームとそれぞれのワークスペースや教材室を配置し、中高学年のワークスペースは小教室として区画できるつくりとした。その他、昇

降口や職員室、多目的に利用できる特別教室等を設けている。渡り廊下で繋がる第1校舎は2階に1学年分のクラスルームと余裕教室を利用したワークスペースを確保し、1階の校長室と職員室があったスペースは全校児童が利用する図書室に改修する計画とした。

検討委員会が進む中で町有林の木材を積極的に活用することが決まり、基本設計段階から地元の森林組合や製材所と供給可能な木材の量や調達時期等の摺り合わせを行った。その結果として地場のヒノキを床のフローリングに、スギを内部の造作や造り付け家具、建具に用いている。

こちらの新校舎も外断熱を採用し、クール＆ヒートトレンチや雨水利用といった自然エネルギー利用を行っている。木造の第1校舎は天井裏や外壁、床下の断熱補強を行い、外周の建具はペアガラスに交換した。

校舎の改築工事は学校環境に制約を与え、児童にも少なからず不便を強いるが、一方で校舎が建て替わる過程を目の当たりにするまたとない機会でもある。そこで毎回、設計や工事期間を通して何かしら子どもたちが学校建設に関われる場を設けるように努めている。それには学校や教育委員会の理解と協力が必須となるが、今回は小学校で「新校舎ワクワクプロジェクト」を立ち上げていただいた。このプロジェクトを通して着工時にはWeb集会を利用して町長や設計者から事業の経緯や設計意図の説明を行い、仕上げ工事が進んだ段階では工事現場の見学会を、また1期工事の完成に合わせて全校児童の参加によりメインの階段を飾るレリーフづくりを行った。このレリーフのタイトルである「十人十色花(カラフルフラワー)」も児童の命名によるものだ。



町有林の木材を用いた内装



全校児童で制作したレリーフ

高等学校建築

使いながら更新し続ける学校づくり

—共学化を契機とした横浜高等学校の改修・新築—

SALHAUS
栃澤麻利

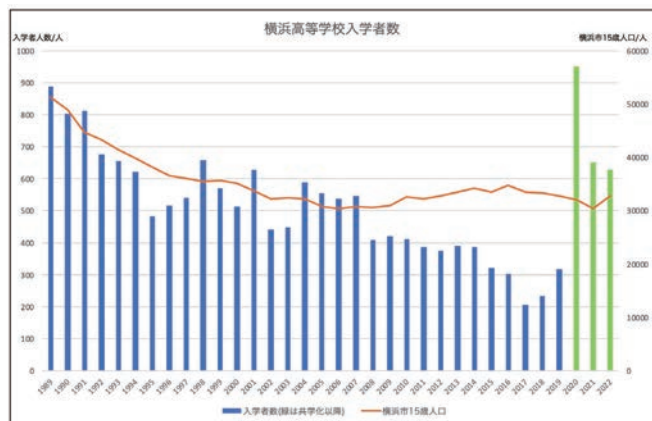


背景

神奈川県横浜市金沢区にある横浜高等学校は、京浜急行本線 能見台駅に近接し、1942(昭和17)年に開学、1946(昭和21)年からは現在地を拠点としている私立学校である。中高一貫校(6ヵ年コース)と高等学校(3ヵ年コース)の併設校で、現在は高等学校に軸が置かれている。高校野球大会での活躍で全国的に知名度も高く、地元の方々に親しまれ、地域のシンボルとなっている学校である。

横浜高等学校は開学以来男子校であったが、近年は生徒数の著しい減少が続いていた。下表は横浜市における15歳人口と横浜高等学校入学者数の推移を比較したものである。1989年(団塊ジュニア世代での人口最多年)のピーク時には約890名であった入学者数は、少子化に伴い徐々に減少していった。しかし2008年以降、横浜市の15歳人口は減少が鈍化したにもかかわらず、横浜高等学校の入学者は急激に減少し、2017年にはピーク時の1/4ほどまでに落ち込んだ。これは、少子化のみならず、施設の老朽化や男女別学(とりわけ男子校)の不人気、生徒数の減少に大きく影響していることを示していると考えられる。

横浜高等学校は、このような状況を打開するために2020年4月に男女共学化することを決定し、2016年から既存校舎を改修すべくプロジェクトをスタートさせた。結果、2020年度の入学者は950名を超え、次年度以降も600名を超える入学者数で推移しており、生徒数増



横浜高等学校入学者数と横浜市15歳人口の比較 (注1)



改修後の外観

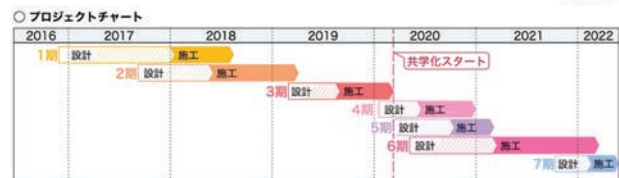
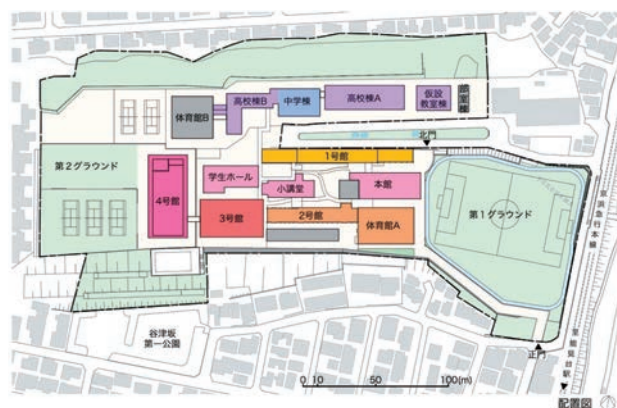


外観(改修前)*

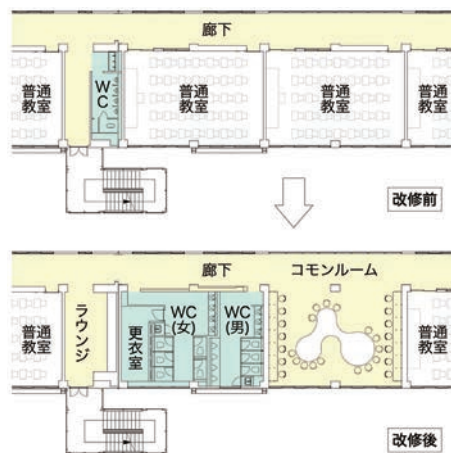
加に伴って校舎棟の新築に至っている。少子化の時代に、生徒数が増加に転じたという点においては、共学化プロジェクトは一定の成果を上げたと言える。以下にプロジェクトの概要を紹介する。

共学化に向けた既存校舎の改修

昭和30年代に建てられた既存校舎は、北側片廊下に画一的な教室がずらりと並ぶ典型的な旧来型校舎であり、



配置図とプロジェクトチャート

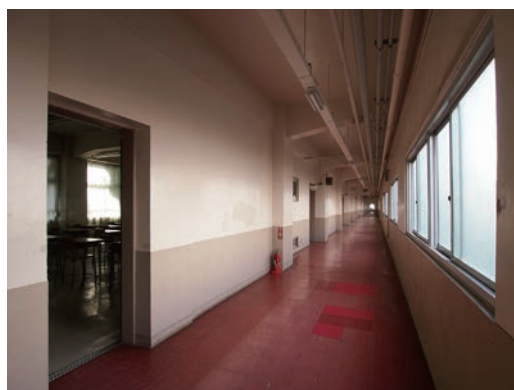


コモンルームの拡大平面図

コモンルーム



1号館廊下(改修後) 教室側の壁と天井はシナ合板貼り



1号館廊下(改修前)*

生徒数の減少に伴い、2016年時点では余剰教室がいくつもある状況であった。プロジェクトスタート時の学校要望は、女子生徒受け入れのための水廻りの整備、改修棟(1号館)の外壁改修(レンガタイル貼り)、廊下の内装改修(腰壁の木質化)であったが、改修にあたっては、単に女子生徒の受け入れに対応するための水廻りの改修だけでなく、共学化により多様化するであろう、生徒同士のコミュニケーションを育む「居場所」を生み出すことが重要ではないかと考え、余剰教室を「居場所」へと転換することを提案した。

「コモンルーム」や「ラウンジ」といった居場所空間は、木を用いたデスクやベンチ、カウンターなどさまざまな設えで学校全体に散りばめられており、休み時間や放課後の居場所として、自習や展示など教室以外の学びの場として、多目的に使われる場所である。また、ラーニングルーム(自主学習室)やキャリアサポートセンター(進路指導室)、グローバルアドミッションズセンター(海外留学支援室)を開設し、日々の学習や進路、海外提携校での研修や留学を支援できる体制を整えた。白色吹付塗装仕上げであった京浜急行本線の車内から見えるファサードは、1号館だけでなく、第一グラウンドに面した東側立面全体をレンガタイル貼りとして外観も一新した。

共学化に伴う新しい教育への挑戦と内外装の抜本的な

更新は、大きなインパクトを与え、共学化初年度に志願者数が大幅に増加するという結果を生み出した。

新築棟での新たな試み

生徒数の増加に伴い、共学化1期生が3年生になる2022年度に教室数が不足する事態が生じ、これを解消するために、校舎棟(4号館)を新築することになった。

4号館はレンガタイル貼りの外観、内装の木質化、コモンルームの設置など、基本的なデザインはこれまでの改修の流れを踏襲しており、加えて1、2階に「ラーニングスタジオ」、3、4階に「コモンテラス」を新たに設けている。

「コモンテラス」は3、4階の普通教室フロアに設けた外の居場所である。谷戸の谷地にあたる敷地の地形に呼応するようにボリュームを削り取ることで生み出された空間で、学校全体の風景が感じられる場所になっている。

「ラーニングスタジオ」は学級にも特定教科にも紐づかない学習空間である。少人数で行う授業や選択科目授業等に対応し、また放課後の部活動に活用できる空間となっている。全10室のうち4室はシアター、サイエンス、ミュージック、ダンスに特化したデザインとなっており、生徒の自主的な活動や学びをアフォードすることを期待している。今後の高校教育は、多彩な授業科目の展開や生徒主体のアクティブラーニング、単位制の導入など、



4号館外観

大きな変革を迎えることになるのではないかと思います。この新しい教育には、これまでの特別教室型校舎(学級に紐づく普通教室+特別教室)では対応しきれず、「ラーニングスタジオ」や「コモングルーム」のような、大きさまざままで自由な学びの場が重要な役割を果たすと考えている。

4号館は2022年4月から使用を開始したが、「ラーニングスタジオ」は授業時間帯の稼働率が非常に高く、生徒1人1人の興味や関心に合わせた学びに対応した空間として有効に活用されており、横浜高等学校が目指す新しい教育の1つの形になるのではないかと感じている。

今後の展望

このプロジェクトでは、長い年月をかけて、使いながらの改修・新築工事を行っており、学校側との情報共有やふと目にする生徒の活動が、次の設計に反映されるというプロセスを経てきた。このプロセスが横浜高等学校の学校整備において重要な役割を果たしており、常にブラッシュアップし続ける設計を行っている。

特に「コモングルーム」などの居場所空間は、共学化により生徒数が倍増し、密度が増した学校の中で、生徒の学校生活やさまざまな活動を支える余白として非常にうまく機能しており、その使われ方を学校側と共有しながら、学校全体に増やしてきた。新築棟においても、必要教室数は確保した上で、「コモングルーム」や「コモンテラス」の設置が受け入れられているのは、こうしたプロセ



4号館コモングルーム 普通教室フロアを吹抜でつないでいる



4号館ラーニングスタジオ

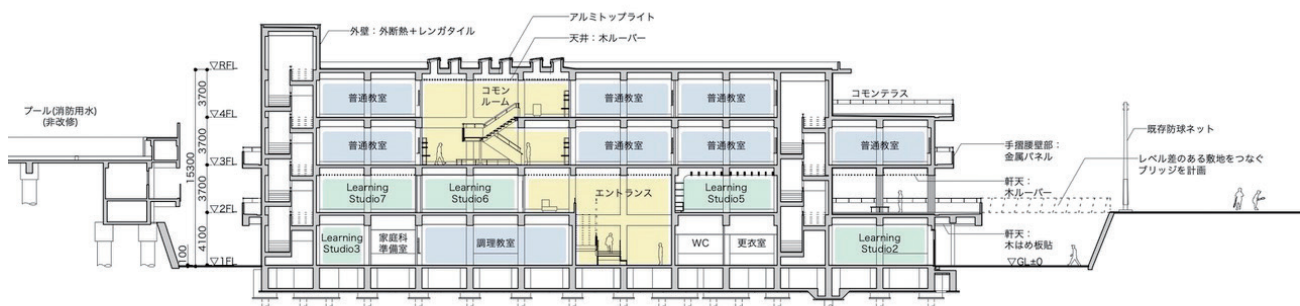
撮影：吉田誠(*のみSALHAUS)

スを経た上で、空間に対する信頼が学校との間で育まれてきたからだと思う。

共学化に向けて学校と二人三脚で行ってきた新しい教育への挑戦と、それに対応する空間づくりのプロセスは6年にも及び、現在もまだ続いている。この経験により得られた知見は、以降の増改築の指針となりうるものになっていると思う。近い将来、老朽化した既存校舎の建替えが必要となってくる。今後の増改築計画においても、新しい教育や学校生活をサポートできる空間づくりを目指して、これまで改修・新築で培ってきた学校との協働のプロセスが継承され、学校空間と使われ方が密接に関係した学校づくりが継続していくことを願っている。

〈注〉

1: 横浜市「長期時系列データ04 年齢(各歳)男女別人口」より



4号館断面図

コモングルーム、エントランス等 教室、特別教室等 管理部門・その他 Learning Studio

第1回 かながわ・けんちく・アカデミー 2022
「タウンアーキテクトを求めて」

地元に未来を託す建築家像のあり方

—ケーススタディ vol.1 武蔵新城& vol.2 藤棚商店街—



神奈川地域会
田井幹夫

本年度よりJIA神奈川の代表が柳澤潤氏となり、今期のテーマとして「タウンアーキテクト」を掲げました。横浜は「都会の田舎」です。良い意味で地元の人々を大切に、地域のネットワークに期待するところが大きい。このような地だからこそ、地域に密着した「タウンアーキテクト」を取り上げる意味があるのでしょうか。

かながわ・けんちく・アカデミー2022は、「タウンアーキテクトを求めて」をテーマに、第1回はPEAK STUDIO (藤本俊大さん、佐治卓さん、佐屋香織さん) とYONG architecture studio (永田賢一郎さん) を講師に迎え、それぞれが関わり続けている武蔵新城と藤棚商店街についてレクチャーしていただき、その後実際に街歩き見学を行いました。

7月23日の酷暑日、JR南武線武蔵新城駅にあるPEAK STUDIOが手掛けたカフェ「新城テラス」において、まず2組の建築家からお話をうかがいました。

YONG architecture studioの永田さんは学生時代に住んでいた「ヨコハマアパートメント」の施主から古家の改装を依頼され、庭をも含めて土間を広く取り、地域を巻き込む活動を可能にするシェアハウス(「藤棚のアパートメント」)に改修しました。その後、藤棚商店街の空き店舗を改修する際、自身の事務所が入居し、その家賃を捻出するために大半を貸しスペースとしたのです。これが「藤棚デパートメント」です。改修設計はハードなデザインだけに留まらずソフトまでも考え、お金や地域における人材、知財を循環させる仕組みを持たせる手法は、2つのプロジェクトに共通しています。

PEAK STUDIOは、あるきっかけで地元不動産屋のI氏と知り合い、部分的な改修から始まり、現在では新築まで依頼されています。I氏はまちづくりに積極的に関

わろうと、自社の物件を改修し、点と点を繋ぎ、面を生み出しています。地元で歴史を紡いできたI氏、そして空間的な操作に長けている建築家の幸せな共犯関係です。これを佐屋さんは「併走型まちづくり」と説明しています。レクチャーと質疑応答の後、街に繰り出しました。

「新城テラス」から「新城WORK」へ。その後、この上階に入居しているコバルトデザイン主宰の星野千絵さんと合流し、星野さんが設計されたブックカフェ「Shinjo Gekijo」に。ここも多くの方々が思い思いの過ごし方をされています。そしてPEAK STUDIOの事務所が入居している「ダイロクパーク」へ。境界線をなくし路地を設け、敷地内に小さな街が出現しています。最後に工事中の集合住宅脇を通りました。「新城テラス」の中庭に接続することで、生活を街中にあえてはみ出させることを意図した計画です。

その後、永田さんの仕事を見学するため京急戸部駅へ移動。まずは「野毛山kiez」、間口1.5間ほどしかない木造の改修。手作り感満載でした。その後「藤棚のアパートメント」へ。パーゴラが完全に緑で覆われています。次に「藤棚デパートメント」へ。ガラス面のスケジュール表にはぎっしりと予約が。奥の右側にこじんまりとオフィススペースがあります。雑然とした配置は自由な使い方を誘発しています。最後はできたばかりの「写真スタジオ」に。公園に面してガラス張りの室内は真っ白で、これからも続くであろう永田さんの飽くなきまちづくりへの可能性を示すようでした。

「タウンアーキテクト」という新たな建築家像を求めて、単体の建築ではなく、街を巡るというのは新鮮であり多くの学びがありました。第2回 かながわ・けんちく・アカデミー2022もぜひ楽しみにしててください。JIA神奈川会員以外の方も参加していただけます。



レクチャー会場



ダイロクパーク



野毛山kiez



藤棚デパートメント

藤本明義氏に聞く

上手に伝えられるのが
プロのマジシャン

今回は、プロマジシャンの藤本明義さんにお話をうかがいました。国内外のコンテストで優勝経験を持ち、バーなどの少人数の店舗から、パーティーや結婚式といったステージまで、さまざまな場所で多くのお客様を盛り上げ、活躍されています。インタビュー中に実際にマジックを披露していただきながら、普段はなかなか聞けないマジシャンというお仕事やマジックのことについてお話いただきました。

——マジックを始めたきっかけを教えてください。

私は基本的に人と会話するのが苦手なんです。仕事柄、人前で台詞など決められたことを話すのは得意なのですが、今でも雑談するのは苦手です。大学を卒業してコンピューターシステム会社で働いていた時、飲みに行った先で周りの気を引くために何か良い方法はないかと考えていたところ、当時ちょうどテレビにMr.マリックが出始めた頃で、もしかしてマジックをやったら喜ばれるのではないかとひらめきました。それでデパートで適当な道具を買ってマジックをして見せたら、とてもうけたのです。初めて人の気を引くことができたことでハマってしまいました。

そのうちデパートでマジック道具を買いあさるようになり、それでは飽き足らずにマジックの道具を扱う専門店に行くようになりました。

最初のうちは1人で楽しんでいるだけで、たまにスナックで披露したり、年に1度会社の忘年会でマジックをするくらいでした。それが3年くらい続きました。

——どのようにしてマジシャンになられたのでしょうか。

ある時、マジックのコンベンションがあることを知りました。世界中から有名マジシャンが来て、ショーやレクチャーがあったり、マジックのコンテストもある。世界中のマジック道具も販売されている。それに参加して、そこで初めてマジックのコンテストを見て、自分も出てみたいと思ったのです。そして翌年のコンテストに出たのですが惨憺たる結果で……。その悔しい思いがあったのが良かったのかなと思っています。でもコンテストに出たことによって、いろいろな人に声を掛けられるようになり、プロのマジシャンからも声を掛けられ、初めてマジックを趣味とする人やマジック関係者の知り合いができました。

そしてその翌年にはオリジナルマジックを考えてコンテストに挑み、優勝することができました。それをきっかけにあちこちのコンテストに出るようになり、海外のコンテストでも優勝を経験するようになりました。しば

らくは仕事をしながら、たまにマジックの依頼があったら出演するようなスタイルでしたが、仕事がいまいちうまくいかずに精神的にまいってしまったり、38歳の時に会社を辞めてプロマジシャンになりました。プロと言っても資格があるわけではないので、自分で「プロマジシャンです」と名乗ればなれるのです。

プロマジシャンになる時に決めたことは、プロになる以上はマジック以外の仕事は一切しないということです。プロマジシャンというのはなかなか世間から認められないもので、「プロマジシャンです」と言うと「本業はなんですか？」と聞かれることもあります。それが嫌なので、マジックだけで生活できていることがプロである証明だと思っています。それからマジックを披露するたびに名刺を配り、とにかく営業しながら20年間続けてきました。

——どのような場所でマジックを披露するのでしょうか。

最初はマジックバーなどマジックをやっているお店に出演して、だんだん大きなステージの仕事もいただくようになりました。

ステージマジックは、宴会場などのステージ上で大勢に見せるマジックのことです。時間は30分くらいのことが多く、食事が落ち着いた頃に出演します。テーブルマジックはお客様が座っているテーブルに行き、各テーブル5分程度でマジックを見せて回るというものです。

私はどちらもやりますが、ステージマジックにもいろいろあり、イリュージョンマジックやハトを使ったマジックはやりません。

——子どもの頃から手先は器用だったのでしょうか。

不器用で工作も苦手でした。私と同じように、マジシャンはもともと手先が不器用な人の方が多いかもしれません。不器用だからきちんと練習するのです。マジックの練習はもちろん、指を動かす訓練などを続けてきたので、道具を器用に扱えるテクニックが身に付いたのだと思います。

基本的にどんなマジックもテクニックがないとだめです。誰でも扱える簡単な道具であっても、テクニックがないと人に見せられるものにはなりません。私がテーブルマジックで使う道具は、トランプもコインもペンもハンカチも仕掛けのないものばかりで、すべてテクニック勝負です。仕掛けがないのでお客様に道具を渡しても大丈夫ですし、ものを消したり移動させたりする時も、仕掛けがあるとかえってやりづらいのです。

——目の前でテーブルマジックを披露していただきましたが、何ひとつ見逃さないように見ていたはずなのに、予想もしないことが起こり驚きの連続でした。マジックをしている時はどのようなことを考えているのでしょうか。

マジックの現象自体は基本的に単純なものばかりですが、人が考えないようなことや気を回さないようなところを突いて、不思議なことを起こすのがマジックです。ですから、このような時に人がどこを見ているのか、またどんなことを考えるのかを予測してそこを突くようにしています。そして、そういうことが平気でできるのがマジシャンです。気付かれたらどうしようと思った瞬間にお客様にバレてしまいます。これはたくさん練習することによって、考えずにできるようになります。

——マジシャン同士で教え合うこともあるのですか。

師匠に付いて修業する人も一定数いますが、私は人に付いて教わったことはありません。ただ、レクチャー会などがあり、そこでプロマジシャンと知り合いになって教えてもらうことはあります。あとはひたすら練習です。そしていかに人が考えてなさそうなことができるかです。

——新しいマジックを考えて演目を増やすこともあるのでしょうか。

はい。すぐに思い浮かぶ時もありますが、一生懸命考えてやっと思いつくことの方が多いかもしれません。でもマジックで大切なのはネタではないのです。マジックの種類は世の中にたくさんありますが、マジシャンが仕事で披露できるマジックは実はあまり多くはありません。道具を使って現象を起こすことはできても、現象が起きればお客様が喜ぶかというところとは限らないのです。その演出やトーク、自分のキャラクターなど、そういうものをすべて含めて見せることでお客様が喜んでくれます。ですからお金を掛けて新しい道具を買っても、全然盛り上がりがないことはよくあります。でも少しでも演出を変えるだけで、同じマジックでもとても驚かれたり、前回とは全く違う反応をもらえることもよくあります。



ステージでマジックを披露する藤本さん

歌の上手い人が音程を間違えずに歌ってもそれだけではお金はもらえませんよね。技術は素人でも身につけられますが、プロは伝えるのがうまいかどうか。お客様に伝えるのがうまいのがプロの歌手であるし、上手なマジシャンだと思います。

——今現在、コロナ禍の影響は大きいのでしょうか。

ご想像の通り大打撃を受けました。仕事がなくなったというか、世の中からいらない仕事になってしまった。人が集まってはいけない、そして飲食店が閉まってしまうとマジックをする場がありませんから基本的に仕事はありません。そういう状況でしたが、最近ようやく出演の依頼が少しずつ戻ってきました。

それからマジシャンは芸人でありパフォーマーなので、歳を取るとだんだん仕事が減っていきます。これが他の業種と違うところです。また、業種によっては協業などができるのだと思いますが、我々が皆さんと接点があるとしたら接待や忘年会などでしょう。お客様のニーズあつての仕事なので仕方がありませんが、そもそも日本は芸人やマジシャンなどの芸に対してお金を払う習慣がありません。私は日本奇術協会に属していて、その理事を10年くらいやっていましたが、みんないろいろもがきながら頑張っていますから、早くコロナが収束して出演の場が戻ることを願っています。

——貴重なお話をいただきありがとうございました。

インタビュー：2022年6月16日 たましん事業支援センター会議室にて

聞き手：望月厚司・関本竜太・小倉直幸（『Bulletin』編集WG）

PROFILE

藤本明義（ふじもと あきよし）

マジシャン

（公社）日本奇術協会認定師範、マジックキャッスルマジシャンメンバー合格カード、コイン、ボール等を使用したテクニック系コメディーマジシャン。2～3人程度のお客様の目の前で見せるテーブルマジックから、200人程度のお客様にお見せするステージマジックまで対応可能。コンテスト入賞回数日本一。世界大会出場多数。結婚式、企業パーティー、レストランテーブルマジック等々での出演多数。

マドリッド発『旅日記』

—国際建築家連合 (UIA) フォーラム

《Affordable Housing Activation》に参加して—

国際委員会
坂田 泉

2022年5月、国際建築家連合（以下、UIA）はスペイン、マドリッドにて「Affordable Housing」をテーマにしたフォーラム《Affordable Housing Activation – Removing Barriers》を開催した。私は、JIA国際委員会メンバーとして、竹馬大二（同委員長）、高階澄人（同アドバイザー）と共に、フォーラムに先立つUIA臨時総会を含む5日間（5/16(月)～20(金)）の全日程に参加した。

DAY 0：5月15日（日）

マドリッド到着翌日。明日からの臨時総会とUIAフォーラムの2つ会場の下見を兼ね、街歩き。ホテルはマドリッドでも一番洗練された通り、Gran Viaに面していて、2会場はホテルを軸にほぼ対称に位置する。

マドリッドは大きな通りで区画された街区に一步入ると「毛細管」のような道が広がる。街の特徴を語る上で「浸透性 (penetrativity)」という指標があると思う。つまり、街の内部へと浸透できる度合いのことだが、マドリッドはきわめて浸透性が高い街だ。臨時総会が開かれるマドリッド建築家協会 (COAM = Colegio Oficial de Arquitectos de Madrid) は、そういう魅力的な毛細管をそぞろ歩くうちにたどり着く。見通し、風通しのいい建物で、通り抜けられ、カフェも併設。街に開かれている。ここで世界各国から集まる建築家たちが建築や都市について語るわけだ。議論が盛り上がらないわけがない。

第二会場は、COAMからGran Via方向に戻り、丘陵に建つ王宮を経て、アプローチ。“Estacion Gran Teatro Príncipe Pio”という劇場複合施設。昔の駅舎を改修した建物だ。こちらでは、水曜日から「Affordable Housing」をテーマにさまざまなイベント、ワークショップが開かれる。



第1会場：COAM



第2会場：Estacion Gran Teatro Príncipe Pio

DAY 1/DAY 2：5月16日（月）/17（火）

いよいよ臨時総会が始まる。会場に集まった各国からの派遣団のほか、オンラインでの参加者が審議に加わる。

会場では久しぶりに会う人やスクリーン越しに見知った顔との熱い交流が続き、なかなか会議が始まらない。

審議事項は多い。規約の改正等の「事務的」な議案はすんなり進む。しかし、国際的組織に特有のそれぞれの地域、国々のアイデンティティーに関わる話はデリケートだ。とりわけ議論が白熱したのはウクライナへの支援動議。会場にはウクライナ建築家協会の会長をはじめ、数人の建築家に参加。一方、ロシアは（もともとUIAの強力な構成員）今回は不参加。ロシアから海外への送金システムが遮断されUIAの会費が払えていない。規約によれば未納国には総会への参加資格はないのだ。

ウクライナの建築家の訴えは胸に迫るものがあった。また、それを支援する国々のメッセージも熱い。しかし、そこにアフリカ、中南米等の「非欧米諸国」の視点が加わると、議論は一気に重層化する。単純にさあ、みんなで支援しましょうとはならない。私もアフリカとの関わりが長いから、アフリカの気持ちはよく分かる。アフリカの戦禍の歴史は長い。簡単に言えば、なぜ「ウクライナだけ」なのか？

白熱した議論の末、動議は「否決」された。動議案のロシアへの排他的な姿勢が原因だったように思う。

こうした審議を通じ、私は、世界から「建築家」の名の下で人々が集まり、自由に議論を展開できるUIAという場の貴重さを改めて実感した。どんなにイデオロギーや思想、信条が異なっても、私たちには「建築家」という共通基盤がある。「建築家」という基盤を通じて、ウクライナ、ロシア、また両国を見守る国々の「UNITY（連帯）」を形成することがUIAの本道だと思う。

左から、竹馬大二（国際委員会委員長）、
筆者（同委員）、高階澄人（同アドバイザー）

UIA会長 Jose Luis Cortesによる開会宣言

DAY 3：5月18日（水）

今日から3日間の日程でフォーラムが始まる。「Affordable Housing」をテーマに、社会構造や文化も異なる人々が世界各国から集まって議論を重ねる。

今回のフォーラムの「構造」はなかなか巧みだ。「Affordable Housing」に直接アプローチするのではない。「Affordable Housing」の促進 (Activation) の障害となる「Barrier」を6つに分類し、Barrierごとに、それを取り除く方法、技術、制度、等々について専門家、実践家が具体的にさまざまな経験、事例を紹介するというアプローチだ。(https://www.ahamadrid.com/barrera/mismatch/)

こうした多様な専門家、実践家たちの意見をまとめることには意味がない。私たちは1つの傘ではなく、大きな樹の下で雨宿りをしている。多様な形の葉が全体として雨を防いでいる。「Affordable Housing」への道もそれぞれができることから始めればよい。私もできることから始めている。明日のワークショップではその一端を紹介する。



フォーラム初日

DAY 4 : 5月19日 (木)

UIAフォーラムもいよいよ終盤。今日は大事な仕事が2つあった。

私はJIAからの派遣により、昨年9月から2年の任期でUIAの“Social Habitat Work Programme (社会的住宅部会)”の委員を務めている。委員は24カ国のメンバーから構成されるが、そのうち今回のフォーラムに参加しているメンバーと参加できなかったメンバーをオンラインでつなぎ、これからのことを話し合った。



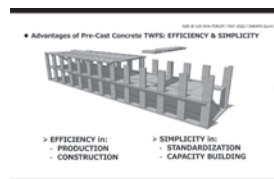
“Social Habitat Work Programme”のメンバーと

もう1つの「大仕事」が、「英国王立建築家協会 (RIBA)」が主催する“Global Architecture Exchanges”というワークショップでの発表。私以外に、日本からは岩堀未来・長尾亜子のユニット (録画)、他にアイルランド (オンライン)、中国 (録画)、英国 (録画)、ブラジル (対面)、ニュージーランド (録画)、韓国 (対面)、オーストラリア (録画)。

私はここ数年、取り組んでいるケニアにおけるAffordable Housingのプロジェクトを紹介したのだが、今回はその「厚肉床壁構造」に着目し、それが東日本大震災後の福島県復興住宅の構造システムを踏襲している点に言及した。

「厚肉床壁構造」は単純明快な構造システムなので復興の過程での住民の要望やプランの変更に対応しやすい利

点がある。ケニアのプロジェクトではさらに「プレキャストコンクリート化」することで施工の効率や平明性を高めようとしている。



プレキャストコンクリートによる「厚肉床壁構造」

また、コメンテーターとのやり取りの中では、「Affordable Housing」の開発において、国をまたぐ技術協力の可能性を指摘。ただし、何か出来上がったものを持っていくのではなく、私が組織するソーシャルデザイングループOSA^(注1)のモットー、“Seeds from Japan to be realized in Kenya”に表現しているように、タネは日本で考えてもカタチにするのは現地の人々と共にという姿勢が大切であることを強調した。

日本における公共セクターの住宅供給は戦後復興から高度成長期を経て、少子高齢化社会を迎えるに及んで一定の役割を終えたと言える。そういう意味では、現代の日本には「Affordable Housing」や「Social Housing」の「好例」は乏しいと言わざるを得ない。

しかし、震災復興住宅の技術的資産を途上国の「Affordable Housing」開発に活用していることを私自身のプロジェクトを通じて紹介することで、現代日本の「Affordable Housing」における世界への貢献の仕方の「一例」を示すことができたと思う。^(注2)



“Global Architecture Exchanges”における発表

DAY 5 : 5月20日 (金)

UIAフォーラム、最終日。「Affordable Housing」について、いろいろな国、地域の人々と考えやビジョンを提供しあった5日間。改めて「家」の大切さを知り、「家」を持たない人々の多さを知り、「家」が社会や環境に与える影響の大きさを知った。“Social Habitat Work Programme”のメンバーと交歓を深められたことも大きな収穫。プログラムはまだ1年以上続く。次に会えるのは、来年7月のUIAコペンハーゲン大会だろう。(https://uia2023cph.org/)

私のマドリッド発『旅日記』もここで終わる。機会があれば、来年はコペンハーゲンからお伝えしたい。

〈注〉

1: ソシャルデザイングループOSAについては以下を参照下さい。

http://osa-rainbow.com/assets/files/Bulletin_210301.pdf

2: 当日の動画を右記でご覧になれます。https://youtu.be/5SkDvPAG5sM

北海道支部

「北海道の建築展2022」

テーマ：受け継がれて進む地域性を見つめて

北海道支部長
小西彦仁

多くの方が来場したこれまでの北海道建築展

北海道支部は、支部設立35周年を記念して9月23日から建築展を開催します。北海道支部では支部発足以降、今回を含め3回美術館での建築展を開催しており、1回目および2回目は北海道近代美術館で、3回目の今回は札幌芸術の森美術館で開催することになりました。

ここで過去の建築展から時系列で紹介します。

1回目は32年前(上遠野徹支部長)、JIA設立の3年後の1990年2月21日から25日まで開催され、テーマは「北の建築家たち—空間への浪漫展」でした。

展示内容は、1.都市の浪漫「ネオ北海道への予兆」、室蘭、旭川、函館、紋別、札幌。2.歴史への浪漫「フロンティアの魅力」、道庁、ヒンデル、田上義也。3.異郷への浪漫、スウェーデンの建築家の空間(5名)。4.自然への浪漫「支部会員全作品展示」。5.創造への浪漫、市民、児童参加による建築空間体験。以上、5つのテーマの展示でした。

付属行事の講演は、「北海道と私」清家清(札幌市立高専(現大学)初代学長)、「家具と建築」長原実(カンディハウス創業者)、「彫刻と建築」国松明日香(彫刻家)、スウェーデンから来札の建築家カール・ニーレンが「私の建築空間」と題し話されました。

その他エクスカーショントして、白井晟一設計の北海道唯一の作品「ルスツ山寮」の見学が行われました。5日間の来場者は4,200名と記録されていて、北海道民の建築文化への興味がうかがえます。

2回目は14年前(圓山彬雄支部長)の2008年2月1日から10日までで、同じく北海道近代美術館で開催されました。テーマは「ココでくらす。ココロでくらす。」で、支部設立20周年記念行事として開催されました。展示内容は、「であう」：北海道の建築家の素顔や趣味などを

紹介。「ねづく」：寒冷地においての建築家のさまざまな挑戦と試み、上遠野邸(JIA 25年賞)を中心に紹介。「かんじる」：地球温暖化、原油高騰、高齢化など建築にできることを紹介。「よみがえる」：古い建築を活かした再生例を紹介。「ささえる」：建築がどのような技術によってつくり上げられているかを紹介。「くらす」：建築家がつくる住宅を紹介し、模型で街並みをつくり展示しました。

付属事業の講演は、「うつろいの空間」坂本昭(建築家)、「金色の塵」齋藤裕(建築家・小樽出身)、「上遠野徹の建築」上遠野徹(元北海道支部長)・角幸博(北海道大学)、「北海道赤レンガ建築賞の20年」越野武(北海道大学名誉教授)、「アイスドームの構造と空間」粉川牧(東海大学)、「産業・まちなか遺産を活かす人とココロ」水野一郎(北陸支部)、「自然素材を生かした藤森流建築の作り方」藤森照信(東京大学)。その他4つのワークショップも行われました。来場者は5,038名で、短期間ですが相変わらず建築展の人気の高いことがわかります。

14年ぶりに建築展を開催

そして今回は14年ぶり3回目の建築展となり、9月23日から10月10日まで札幌芸術の森美術館で開催します。北海道の建築展2022のテーマは「受け継がれて進む地域性を見つめて」。第1部は北海道の建築の歴史・技術・工法・意匠を通し、過去から未来へとつながる建築の流れを紹介します。第2部では北海道の風景の中で、建築家がどのようにそれを解き建築を創りあげているか、実作を通し紹介します。第1部のキュレーションおよび全体の監修はジャーナリストの磯達雄氏に依頼しました。第2部のコーディネートは景観研究者で北海道在住の植田暁氏に行っていただきます。



「北の建築家たち—空間への浪漫展」(1990年)



「ココでくらす。ココロでくらす。」(2008年)



前2回とは違う視点で北海道の建築を見ていただけるように、磯氏、植田氏、そして我々建築展実行委員会のメンバーが鋭意準備を進めています。気持ちの良い秋の北海道に、皆様のご来場を心よりお待ちしております。

***本展に先立ち、9月16日から18日までの間、告知展をチ・カ・ホ「札幌駅前通地下広場」にて開催いたします。**

こちらもぜひご覧ください。

「北海道の建築展2022」

期間 2022年9月23日(金) — 10月10日(月)

会場 札幌芸術の森美術館

主催 公益社団法人 日本建築家協会 北海道支部



詳細はHPをご覧ください。

<https://www.jia-hok.org/hokkaido2022/index.html>

批判的地域主義の建築

北海道という土地では、長い歴史においてさまざまな建築が建てられてきた。それはまず、大地と結びついて暮らすアイヌの住居であり、和人によって築かれた開拓地の建物であった。明治維新後には次々と新しい都市が開かれ、それは日本の近代化の先駆けともなった。冬季は厳しい寒冷の地であり、これに対応した建築の技術も研究された。その中でコンクリートブロックや板金といった材料が見出され、広まることにもなった。

世界的な建築デザインの流れを見ると、機能主義のモダニズムが台頭する20世紀以降、あるいは新古典主義の様式が各国で取り入れられる19世紀からといってもいいが、共通性を志向するグローバリズムが席卷している。北海道の建築も大勢としてその流れにあるが、一方でこの地域ならではの建築のあり方もしっかりと探られた。それは建築のグローバリズムに抵抗する志向である。そうして試みられる建築は、地域のルーツ的なスタイルを遡ろうとするものだけではない。時代ごとに新たな地域性を発見しようともしてきた。

こうした態度を、建築評論家のケネス・フランプトンは、批判的地域主義（クリティカル・リージョナリズム）と呼び、メキシコのルイス・バラガンやポルトガルのアルヴァロ・シザらの作品をその例に挙げている。北海道の建築において根底にあるのが、この批判的地域主義な

のではない。もちろん、どの地域においてもそうした態度は可能であろうが、日本国内でもその流れがはっきりと見て取れるのが、沖縄と並んで北海道なのである。

そうした視点から、この展覧会では北海道の建築を特徴づける作品を選び出し、それらをつなげて見ることによって、近現代の北海道建築史を概括できるよう試みる。展示においては、北海道の地域性と結びついた建築の代表作を、「〈人間が住む大地〉の風景」「近代都市の発展と復興」「冬でも楽しい北の暮らし」「地域と結びついた素材」「新たなデザイン潮流を開く」という5つのサブテーマに分けて、それぞれに紹介する。併せてこの地域の建築づくりをリードしてきた北海道の主要建築家についても位置付けを行う。

北海道の建築は、以前からたいへんに興味深い対象として映っていた。しかし北海道は、自分にとって出身地でもなければ継続して暮らした場所でもない。それゆえ、北海道の建築をテーマにした展覧会の企画をJIAの北海道支部から依頼された際にはためらいがあった。しかし、「地域の外からの視点がほしい」と説明され、それならばということで引き受けさせていただいた。私なりの「批判的」なスタンスが伝われば、本望である。

磯 達雄 (建築ジャーナリスト)

重層する都市景観の視点と課題

—千代田地域会の景観活動—



千代田地域会
景観WG代表
桐原武志

2015年開催の第24回保存問題東京大会時に、東京14地域会の協力のもと「未来へ継承したい環境・景観・建造物・建築物」をテーマにまとめ、大会シンポジウムで各地域会から発表されました。その時の資料をベースに「未来へ継承したい風景」として連載しています。

千代田区は江戸城遺構の皇居を中心とした江戸期の層に、日本の近代化の歴史が重層化され多様な景観をつくっています。千代田地域会では重層化した景観を「都市の基層」と名付け、いろいろな切り口で景観調査を行ってきました。例えば、区内を12の界限(右図)に分け、その特徴の調査。広重が描いた名所江戸百景と現代の景観を比較する調査。総合設計制度で生まれた公開空地を都市景観の視点で見た調査。都市交通を都市景観の視点で見た調査。さらに、千代田区内の景観上重要な建築リストを作成し、千代田区役所の景観担当部署と景観に関する協議なども行っています。今回は、単に区内のよく知られた建物・景観を紹介するのではなく、千代田地域会が行ってきた景観調査活動からの切り口に、景観を未来に継承するための課題を含めて紹介します。



千代田区内を12の界限に分けて調査

界限1 時代が重層する景観：江戸城内濠と丸の内高層ビル群

右写真は三宅坂から見た桜田濠と丸の内の高層ビルが併存し歴史が重層した景観です。右の景観では丸の内のビル群は皇居の土塁や濠に比べ控えめですが、皇居前広場では高さ制限が撤廃された超高層群が津波のように皇居前広場に押し寄せ新旧のバランスが崩れています。過去の景観に現代の景観をバランス良く重層させ未来に継承することが求められます。



桜田濠と高層ビル

界限2 ビルの谷間に安らぎの空間：丸の内仲通り

コロナ禍もあり、オフィスに求められる環境も効率一辺倒でなく、人間らしさを感じさせる環境が求められるようになりました。丸の内仲通りは2002年からの整備計画が進められ、アスファルトだった車道は歩道と同じ落ち着いた色調の斑岩の舗床に代り、街路樹はビルの屋上から見ると地面が見えないくらい茂り、人々に安らぎを提供する空間となっています。



丸の内仲通り

界限3 国政のシンボル、国会議事堂のビスタ景観

霞ヶ関の官庁街を代表する国会議事堂前の景観です。2006年に定められた都の景観誘導指針により、議事堂を正面から見た場合、後方1キロ以内につくられる建物は議事堂のドームの下部を超えないように定められましたが、景観誘導指針が制定される前に建てられた2棟の超高層ビルがドームの左右に見え、議事堂のシンボル性を弱めています。道路両側の高い並木により、国会議事堂へのビスタは強調されていますが、閉鎖的な景観です。アメリカ連邦議会、ドイツ連邦議会のように開かれた議事堂をイメージさせる景観に変え、未来に継承する必要性を感じます。



国会議事堂

界限9 神保町の古書店街

学生の街神保町を代表する景観が古書店街です。しかし、時代と共にスポーツ用品店、カレー店、楽器店が生まれますが古書店は少なくなり、さらにネット通販での古書購入が普及し、古書店の数が減少しましたが、ネット専門の古書店がオープンするなど新たな動きが見られます。古書店主の方にヒアリングを行うなどし、古書店街の景観を継承する方法を探っています。



神田古書店街

界限12 秋葉原の雑然性と多様性の景観

千代田区には、建物の形状や色彩などを規制し統一感ある景観を求める「千代田まちづくりガイドライン」があります。統一感も都市の景観の1つですが、雑然とした中に活気を感じられる景観も大切な都市景観です。その代表が秋葉原電気街です。電気街にオタク文化が加わっても雑然性・多様性は継承されましたが、神田青果市場の跡地は再開発で高層ビルに変わると、雑然とした秋葉原の景観は消えてしまいました。再開発という手法は雑然性・多様性を継承することができないのではとさえ思われます。これからは生物多様性の社会が求められるように、都市景観も雑然性・多様性を活かす計画手法が求められます。



秋葉原電気街

ダイナミックに交差する江戸と近代：日本橋川と首都高速

1964年の東京オリンピックに合わせ、日本橋川を覆うように高速道路が建設されました。以来、首都高は都市景観の悪例として見られ続けています。日本橋に架かる首都高を地下化する事業が進められています。しかし、首都高を日本橋川から撤去することが未来に継承する唯一の方法なのでしょうか？首都高も時代の重層の1つです。首都高を撤去するのではなく首都高の大規模改修に合わせてデザインを再考し、日本橋川と首都高の関わりを活かしたダイナミックな都市景観に変え未来に継承したいと願います。



神田川に架かる高速道路

公開空地が生み出す新たな都市景観

1970年に導入された総合設計制度に伴い公開空地が生まれました。広場、公園に続く屋外空間として、都市景観に寄与する公開空地も増えてきました。写真の飯田橋2～3丁目の公開空地は公開空地を連続させ緑豊かな通路空間を生み出しています。公開空地を新たな都市景観を生み出す手法として注目し、分類と整理を進めています。



飯田橋2～3丁目の公開空地

復活する水辺景観：マーチエキュートと神田川

御茶ノ水駅近く神田渓谷と呼ばれる緑の景観を流れる神田川は、秋葉原近くになると兩岸をビルに挟まれる景観に変わります。ビルの道路側のファサードに対し神田川側は裏面で、殺風景な景観になっています。旧万世橋駅の遺構をリノベーションし2013年にオープンした商業施設「マーチエキュート神田万世橋」は神田川沿いに親水デッキを設けるなど、賑わいある親水景観をつくり上げています。神田川沿いの他のビル群も神田川面のファサードを川面に配慮したデザインに一新させ、水辺景観を未来に継承したいと思います。



マーチエキュート神田万世橋と遊覧船

鉄道景観：東京駅と駅前広場・行幸通り

東京駅は戦災で失われた3階部分を復元し、竣工当初の姿に生まれ変わり、駅前広場もバスやタクシーに乗り換える交通広場から、行幸通りと一体となった歩行者空間になり、首都の玄関口にふさわしい景観へと一新されました。東京駅前の景観が各地の駅前広場を魅力あるものにするための先例になることが期待されます。右の写真の車窓からの景観も都市景観として重要です。



東京駅と駅前広場



鉄道景観：地下鉄丸ノ内線から聖橋と御茶ノ水駅を見る

自ら事業主となり、 暮らしと街に働きかける

—設計者が行う、不動産事業も含めた建築設計—



ほうじん
齋神尚史



「KITAYON」(東京・西荻窪、2017)

自らの手で街中に小さな建物をつくる

私たちの設計事務所には、自らが事業主となり土地の購入から取り組んだ、住まいとアトリエ、店舗の複合建築「KITAYON」があります。初めて手がけた自社の建物で、維持管理も行っており、今年3月で5年が経ちました。多くのメッセージを込めてつくり上げた建築物ですが、ここでは以下の2点を取り上げてお話ししたいと思います。

1: これからの新しい住み手のこと

どこかに勤めるのではなく、職住近接で商いをしながら、等身大の経済規模“小商い”で暮らす人々の拠点づくり。彼らの生き方を実現すべく、個人が借りることのできるサイズの舞台づくりを行いました。設けたのはアトリエ付き住宅2戸とアトリエ店舗スペース3戸。入居者探しも極力自分たちで行い、魅力的な作り手たちが入居してくれています。

2: 商店街の活性化

それぞれの区画は、全て敷地内に引き込んだ2本の路地で街と繋がっています。各区画で商いを始めた入居者が生み出す活気が、路地という公共空間を通じて、街に新しい活気とエネルギーを届けることを期待しました。

私たちは、自らが事業主となることで、設計者だからこそできる「志を持ったプログラム」と「建築」がシームレスに繋がった建築をつくり上げるように努めました。具体的には、応援したいと思う暮らし方が実現できる空

間の実現を優先することにしました。通常は、設計者と別「事業者」があり、その事業者の(時に経済性を強く優先させた)計画のもとに設計を行います。そのプロセスを設計者自身が全て手がけることで、一貫して設計者が描きたい建築のあり方を決めていくことができます。またその際に、その「応援したい暮らし方の実現」という優先事項が、敷地内での閉じた成果にとどまるのではなく、街に対しても役立つことを意識しました。今回の設計で導き出した敷地内の路地は、私有地ですが公共スペースでもあり、街における毛細血管のような形で街の活性化に繋がっていきます。

もちろん適度な事業性を持たせていることも、とても大切なポイントだと思っており、この建物運営を通じて、今後も5年から10年ごとに街に建築を建てていくための頭金を稼いでいけるための運営収支の確保を目指して設計しています。

新たな展開に向けて

そのような志を込めてつくり上げた「KITAYON」が完成してから5年が過ぎた今年3月、「KITAYON」の真向かいの土地を購入しました。今回は敷地が半分のサイズですが、駅方向からの見通しがよく、また二面接道の立地となっています。「KITAYON」では狭い間口の接道条件を踏まえて敷地内に私道を引き込む計画としましたが、今回は敷地脇にすでにある私道を路地と見立て、また上方に向かう階段を、上りたくなるような立体路地として整備し、新たな街の毛細血管となるように整備していきます。

これらはとても小さな取り組みですが、設計者として座して待つのではなく、自らの手で私有地から生まれる公共路地と賑わいがいくつも整備されていくという、ボトムアップ型の新しい社会資本整備の実現を夢みて取り組み続けたいと思っています。



「KITAYON 2 (仮)」(2022～)

リフォーム設計で 気を付けるべきこと



山崎哲法律事務所
弁護士
安藤 亮

人口減少や国の住宅政策として、リフォームの需要は今後ますます大きくなると思われます。日本建築家協会関東甲信越支部には既存建物の維持管理に関わるメンテナンス部会があるとのことで、リフォーム業務に関わる建築家の方も多いと思います。

リフォームと新築工事との違い

リフォームは、既存建物の存在を前提とするため、既存建物に適合させて設計する必要があります。例えば、浴室にユニットバスを新たに設置する場合、既存浴室に適合するように浴室内部を設計し、浴槽を選択する必要があります。また、既存部分を利用するのかしないのか、どの程度利用するのか、間取りの変更をする場合に構造上の問題がないかなど、検討すべき事項は多岐にわたります。建築家の皆様はこれらは当然のことと認識されていると思いますが、ちょっとした認識不足が契約不適合（瑕疵）につながることもあるので注意が必要です。

リフォーム設計で気を付けるべき点

リフォームの設計には、上記のように新築とは異なる特徴があります。思いがけないトラブルを避けるために、いくつか具体例をご紹介します。

①マンションの間取り変更

マンションのリフォームで、和室とリビングをひと部屋に間取り変更する場合、和室とリビングの間の間仕切り壁や天井を取り払い、畳や床も撤去することが必要となります。特に、リビングに敷いていた絨毯、床下地等を撤去してフローリングにする場合は、遮音性に影響が出ることがあり、下階への騒音問題が生じることがあります。

マンションでは、騒音問題予防のため、管理規約で乾式二重床システム等の遮音等級が定められている場合があります。管理規約の定めを考慮せずにリフォームの設計をし、騒音問題が発生した場合、契約不適合（瑕疵）責任を問われる可能性がありますので、現地の状況や管理規約の内容をよく確認して設計する必要があります。

②タワーマンションのリフォーム

マンションのリフォームの設計を受託した設計者が、販売図面（間取図）を確認しながら設計図書を完成させ

たのですが、完成後に当該マンションがタワーマンションの15階であることが判明。スプリンクラーの存在を無視して設計をしていたため、設計のやり直しをせざるを得なくなりました。消防法施行令第12条により、マンションでは11階以上に原則としてスプリンクラーの設置が義務付けられています。現場を確認し、施主から聞き取りをすればこのようなことは起きなかったと思いますが、図面の確認のみで設計を進めたために、このような事態になってしまいました。

③浴室のリフォーム

浴室リフォームの設計の不備の責任を問われた裁判例もあります。マンションのリフォームに浴室のリフォームも含まれており、浴室工事の設計も設計者が担当し、新しい浴槽も設計者が選定して発注しました。リフォーム完了後、浴室から下階へ漏水したのですが、漏水は、浴槽の排水管と浴室の床の既設埋設排水管の接続部から漏れた水が防水層の穴ないし破れから溢水したことが原因であることが判明しました。

裁判では、「浴槽の排水管と浴室の床の既設埋設排水管との位置がずれており、そのまま繋ぐことができなかったことが認められるが、これは、設計者が、浴室の床の既設埋設排水管の位置を確認しないまま浴槽を選択したことが原因である」と判示されました。そして、この位置ずれのためにバイパス管を別途接続する必要が生じましたが、浴槽の位置が低かったため、浴槽の底と床との間の隙間（配管スペース）が狭く、配管作業を行うスペースが十分にありませんでした。このような狭いスペースに施工者がバイパス管を施工した結果、配管の繋ぎ目から漏水したのですが、このような事情においては、設計上の瑕疵ということではできても、施工上の瑕疵ということではできないと判示されました。

対処方法

リフォームは既存建物が存在することが大きな特徴です。既存建物の状況を慎重に確認するとともに、施主からも状況を聞き取り、設計作業を進めることで、トラブルの大半を避けることができますので、ぜひご留意ください。

秋草の庭 堀口捨己先生へ



篠田義男

コロナ禍での在宅勤務の合間、本を読む時間ができたので、気になっていた堀口捨己の本を紐解くことにした。母校明治大学の建築学科は戦後堀口によって組織され、堀口は日本建築史と造園を主に講義していた。建築家であり分離派のイデオログだった堀口の存在は、学生時代から通奏低音のような響きを私に与え続けていたが、残念なことに堀口は私が昭和40年に入学した前年、定年退職し神奈川大学に移っていた。幸い4年前期の造園の講義だけは母校で継続していたので、聴き漏らすまいと固唾をのんで期待していたがこれも堀口が体調を崩し、造園の課題作品だけの提出となってしまう。後任の北海道大学から赴任した木村徳国教授の「大丈夫、僕が大森のお宅へ伺い、必ず君たちの作品を先生に見ていただくので」という特徴ある甲高い声に励まされ提出した作品に、すでに伝説的存在だった堀口から「優」が付いて返却されたことで、気持ちが高揚したのは忘れられない記憶となった。

そんな微かな堀口との関係が一変したのは、坂倉事務所所在籍時、阪田誠造さんと共に担当した別荘の施主が、堀口晩年の重要な茶室「^{かんきよ}碕居」の主でもあったという偶然からだった。「碕居」は炭鉱を経営されていた施主の強い希望で、扱い難い栗材を、柱や床框など意匠上重要な部分に使ったことで知られていたが、初めて見学を許された折、堀口好みと言われる硬質の緊張したプロポーションの小間と予想外に浮遊する印象のある広間の細密で華麗な桐の天井格子に息を飲んだ。しかし「七事式などして遊ぶ広間」と堀口が説明した広間八畳から、ややずれて設えられた竹縁から「秋草の庭」に拡がるビスタの連続に、私の緊張は一瞬で解放された。視線の先に、堀口が戦前の岡田邸から繰り返し洗練させてきた儚い秋草に対比して際立たせる屏風の見立てとして、黄金色の竹垣が堂々と配されていたのを確認したからかも知れない。

施主からは、千日近く続いた「碕居」の現場に、堀口が風呂敷を抱えて通い詰めた様子を、折に触れて伺った。床框の「手斧はつり」にイメージ通りの勢いが感じられなく、撥ねた栗材を山の様に積みせ、造園用の小松石に腰掛けられて庭の構成を日ごと考え続け、ぼつりと水澤工

務店の金澤棟梁に指図されたエピソードなどは、施主の情熱も堀口が求める建築の実現を支え続けた大きな力であったことを想像させた。

「碕居」は竣工以来57年経過して施主の世代も新しくなったが、お茶室も庭園も堀口の指図した世界を見事に維持し続けている。堀口茶室の集大成として、「碕居」の価値を広く共有できないかと、国の登録有形文化財に登録できる築50年を過ぎたあたりから、登録の可能性を模索していたが、登録有形文化財の場合、建造物が対象で、庭園と建築が不可分と思われる「碕居」では違和感があった。そのような中、庭園を記念物として登録できる制度ができたことを文化庁で伺い、「碕居」と「庭園」を一体的に登録を願う私の想いを、施主に思い切って相談してみた。施主の同意は難しいと想像していたが、施主の堀口への深い敬意が勝り、2017年に登録の運びになったことは嬉しい出来事だった。最終的には、登録有形文化財に「碕居」と「腰掛け待合」および「門」が登録され、登録記念物として「秋草の庭を中心とした庭園」の同時登録である。その一体的考察を京都造形大の故中村利則教授に纏めていただいたのは、花を添えることになった。

大学入学でまず求めた『新建築』にたまたま掲載されていた作品が、奇しくも「碕居」であった。また、堀口に提出した私の造園作品は、「碕居」秋草の庭で堀口が構想した「宗達の屏風の見立て」という構図にインスパイアされた習作でもあり、後の出来事に不思議につながった。

恩師堀口がそれらをどう思ったか問うてみたかったが、叶わぬ願いである。



「碕居」竹縁から秋草の庭を望む

(撮影：篠田義男)

(篠田義男会員は2022年総会でJIA名誉会員に選出されました)

施主について 考えてみた

鈴木 晋



設計の依頼を受け、これからできあがる建築について考え始める時間は、設計過程の中で、もっとも楽しい時間である。はじめて施主と顔を合わせ、建築に対する想いを聞くと、設計者としてだけでなく、1人の人間として未来へ進もうとする意欲が湧く。

昨今の施主は、現在のようにインターネットが発達する前と比べ、多様化した暮らしや生活に対する新しい情報や個別の知識を多く持ち合わせている場合が少なくない。このような施主と建築をつくる時に、考え方や意図を正確に読み解くだけでなく、設計者と互いにその建築へのイメージを成長させる「創造的な設計チーム」となることは、次の時代の新しい建築をつくるきっかけになると考えた。

このことを、経験・感覚・勘に頼るのではなく、方法として認識したいと考え、約6年前に設計業務を行いながら、大学の博士課程に通い研究活動をした。そして「設計プロセスにおける施主と設計者との打合せでの設計案の提示方法に関する研究」としてまとめ、学位を取得した。研究の仔細は割愛するが、論としてまとめるために、多数の設計者から実際の設計業務での設計プロセスや施主とのやり取りについて何度もインタビューを行い、その後、結果を設計者に説明し意見をいただいた。これらの活動は私自身にとって有意義な時間であり、そして設計者にとって、多くの設計組織や設計者の現在の技術を互いに共有することの重要性を認識した。

今後も設計を続けながら、並行して自分なりにできることにチャレンジしていきたい。



医療法人社団 清風会 平野医院

地域社会における 建築とは

永峰麻衣子



私は2013年に栃木県に教員として赴任し、専門会員としてJIAに入会しました。それまで栃木県に縁がなく、栃木地域会に所属し、地域会のみなさまに多くを教えていただき、私1人では知ることのできない貴重な経験をさせていただきました。

地域会のイベント「スクールin栃木」には、毎年学生たちと参加し、他大学の方々、地域会の建築家のみなさまと、大谷石蔵や洋館(宇都宮市)、蔵の残された街並み(栃木市)、太田市美術館・図書館など、県内を街歩きしました。どの時間も教室の中では学ぶことのできない、貴重な空間体験で、長年各地で試行錯誤されてきた建築家のみなさまの話を直接うかがい、学生たちは自身の設計テーマを深めることができたのではないかと感じています。

2020年春に教員生活をリセットし、埼玉県大宮の父の設計事務所へ戻りました。大宮駅東口再開発事業では、高齢の父のサポートで再開発組合理事長代理を務めています。学生の頃に読んだ小説『大聖堂』を思い出しながら、20年近くにわたるこの官民連携事業の最終プロセスに関わっている偶然に驚きつつ、最後まで丁寧に向き合いたいと思っています。

施主側としてこの事業に携わり、建物の設計者と建築家では、知識を差し出すフィールドが異なることを実感しました。JIAという建築家組織に正会員として参加させていただき、社会に豊かな建築空間を構築するお手伝いを通して、個の立場とはまた違う新たな視点に気づけたらと思っています。



ケン・フォレット、矢野浩三郎訳『大聖堂』上・中・下巻(新潮文庫)

交流委員会 Aグループ

親睦ゴルフコンペを開催



交流委員会
Aグループ
前田製管
大島寛隆

3年ぶりのゴルフコンペ

交流委員会Aグループの恒例行事、「第31回親睦ゴルフコンペ」が令和4年5月14日(土)に開催されました。前回のコンペは令和元年10月に千葉県富里市で行い、新型コロナウイルス感染症の影響でそれから3年ほど開催することができませんでした。

待ちに待った今回の舞台は、埼玉県大里郡寄居町にある「平成倶楽部鉢形城コース」^{はちがたじょう}。平成倶楽部鉢形城コースは埼玉県の西部、関東平野を流れる荒川の南側に位置しています。鉢形城とは近隣の歴史あるお城です。文明8(1476)年、関東管領であった山内上杉氏^{やまのうちのうえすぎ}の家臣である長尾景春^{かげはる}が築城したと伝えられています。「平成倶楽部」については、平成元年に開発許認可を取得したことから、平成の倶楽部ということで名付けられたようです。

クラブハウスは歴史ある神社のような建物で、日本建築の大家である佐藤忠弘氏が設計された平安朝寝殿造りのクラブハウスです。中へ入ると、ロビーは高い吹き抜け天井で、白い紙を組み合わせたような折り紙風の内装となっています。建物の前面には池をメインにした広い日本庭園が広がっています。ロッカールームへと続く長い廊下には絵画が展示されています。ここは本当にゴルフ場でしょうか、と思うくらいの、美術館にしても良いくらいの建物です。

コースは、広大でフラットながら巧みに配置されたハザードが戦略性を感じる全18ホール。風格漂うこのコースは造園学の大家である斎藤一雄氏の造園作品が美しく、優雅でゆとりのあるプレーが満喫できます。前日は大型台風が来たような悪天候で開催が危ぶまれたのですが、当日は打って変わって天気恵まれ良いコンディションとなりました。

プレー後の懇談でも親睦を深める

参加者はAグループだけでなく過去に本グループに在籍されていた鈴木俊彦様、榊原信一様、鬼島良洋様はじめ、他グループからもご参加いただき、3組12名で開催することができました。

スタートの1番ホールは真っすぐなミドルホールです。フェアウェイがとても広く気持ちよく、気分良くスター

トできます。多くのホールは広いフェアウェイでコースメンテナンスも充実しています。これなら良いスコアが続出すると思いきや！各ホールはコース設計が戦略的で、微妙に変化があり、グリーンのカップの配置も微妙なセッティングで、楽しさの中にも難しさが潜んでおり、なかなかスコアを伸ばせない参加者が多発しました。前半のアウトコースが終了し、昼食でクラブハウスに戻ってきました。昼食メニューは、ステーキ、マグロ、中華とバラエティに富んでいます。

食事でエネルギー充電後、午後のハーフが始まります。難コースに苦しみながらも、午前中からプレーしてコースに慣れたこともあり、スコアが伸びる参加者が増えてきます。優勝は誰になるのでしょうか。スコアの集計が楽しみです。プレー後の疲れた体を大浴場のお湯でほぐしました。

プレー後のパーティーで成績を発表し、優秀な成績を収めた上位者等に賞品を授与しました。このコンペでは持ち寄りで商品を持参いただくのですが、今回も素晴らしい商品がたくさん集まりました。賞を取れなかった方々にも、すばらしい(?)参加賞を持ち帰っていただきました。パーティーも楽しく懇談することができました。思えばコロナ禍が続いていたので、プレー後の大浴場やパーティーも久しぶりであります。

結果、優勝は生和テクノスの平野二郎さんでした。今回は他の方々にも優勝を目指し大いに頑張っていたと思います。前回と比べ参加者が少なかったものの大いに盛り上がり楽しい親睦ゴルフコンペでした。他グループの方も含め、多くの皆様の参戦をお待ちしています。



参加者で記念撮影

交流委員会 Cグループ

「建物見学会」など
交流活動の再開を願う

交流委員会
Cグループ
フッコー
杉山成明

Cグループの紹介

関東甲信越支部交流委員会は、業種によってグループが分けられ同業種の協力会員が相互の親睦を深めながら協会活動を支えています。市場においては競合となり得る企業の集合体ですが、市場動向をはじめさまざまな情報を共有することによって、相互の益を超えた関係がグループ活動の中で構築され、より円滑に協会活動が行える原動力となって運営されています。

Cグループは、正会員3名と「窯業・金属・石材・ガラス・プラスチック」などを中心とした外装材メーカー約40社の協力会員で構成されており、交流委員会の中でいちばん会員数が多いグループです。代表幹事1名および副代表幹事3名が中心となり、毎月第2火曜日に定例会議を開催。会議には平均10名を超える会員が出席し、協会および支部の活動報告や活動計画、またグループの活動計画を共有して運営を行っています。

グループ活動「建物見学会」について

2019年末より世界的に流行した新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、この2年間は残念ながらグループ活動を自粛せざるを得ない状況となっています。毎月の定例会議および会議後の親交を深める懇親会も、ウイルス感染者数を考慮してオンラインやハイブリッドでの開催を余儀なくされ、グループ活動のメインイベントである「建物見学会」も2019年11月に実施した「建物

見学会in米子・出雲」を最後に残念ながら実施できていません。

建物見学会は、正会員とCグループ協力会員、そして他グループからの参加者も含め総勢20名ほどで毎年テーマを決めて実施しています。訪れる街の歴史背景をもとに歴史的建造物や産業遺産、また近年竣工した著名建築家による建築作品などを、現地の公共交通機関を使って移動しながら見学し、地元の名産品やご当地グルメに舌鼓を打ちつつ建築話に花を咲かせる、1泊2日のとても有意義な活動です。

最後に訪れた「建物見学会in米子・出雲」では、現地のローカル電車「^{いちばた}一畑電車」にて国の登録文化財でもある出雲大社前駅の駅舎より出雲大社参拝、木綿の集積地として栄えた木綿街道で歴史探訪、日本庭園を極めた足立美術館、照明デザイン最優秀賞のライトアップされた水木しげるロードなど、とても充実した2日間でした。

2020年に訪れる予定であった「建物見学会in高知」は残念ながら順延となっていますが、新型コロナウイルスの収束を待って高知城歴史博物館や坂本龍馬記念館など、土佐の歴史と著名建築家の作品に触れる1泊2日の建物見学会を予定しています。Cグループ以外の方も参加も可能ですので、ご興味のある方はぜひご参加ください。

建築家協会本部および関東甲信越支部の活動、そしてグループの枠を超えた交流が戻ることを、Cグループ一同、心より願っています。



2018年2月 建物見学会(長崎)



2019年11月 建物見学会(米子・出雲)

信頼からつくる建築

—コミュニケーションを大切に—



伊藤昭博

小学校6年生の時、実家のリフォーム工事を体験した。当時ガンブラが流行っており、僕も大好きだった。工事現場は、巨大模型に見えた。担当設計者の図面や打ち合わせ姿に憧れ、将来建築設計の仕事に就くことを決め、夢が叶った。事務所設立し、今年22年目。住宅設計が中心。近年は店舗や事務所なども増えてきた。

設計依頼のきっかけ

設計依頼は施主からの紹介が最も多く、掲載雑誌やTVの順である。いずれもHPを確認し、電話やメールで直接問い合わせとなる。年数回OPEN HOUSEを行っていたが、コロナ禍以降実施していない。施主からの紹介パターンで、「通りがかった人が家の設計者を尋ねてきたので、事務所を教えた」ということも多くあり、設計事例を見ての依頼は、設計者にとって幸せである。

また、群馬県で毎年開催される「ぐんまの家 設計・建設コンクール」。これは群馬県内に優良な家を増やす活動で、実際に住んでいる家の様子を審査し、施主と設計者、施工者を表彰するもの。受賞作品は県作成パンフレットやHPで紹介される。弊社も毎年参加しており、ここから設計依頼へつながることも多い。

設計依頼から契約

問い合わせをいただくと、無料相談を行う。過去の作品写真、設計の考え方、進め方などを紹介。目的は、自分たちのことを知ってもらい、相手のことを知ること。今後始まる永い付き合い、お互いの相性が大切。希望により、過去の作品事例見学を行うこともある。

正式依頼が決まると調査・企画業務委託契約(10万円)を締結し、設計開始。契約時、設計ヒアリングシートを渡し、設計に向けての希望をまとめていただく。記入後、第1回目の打ち合わせとなる。

ヒアリングからファーストプラン提案

第1回目の打ち合わせでは、ヒアリングシートを見ながら設計条件を確認する。心掛けているのは、“いかに抽象的に聞き出すか”である。具体的では設計が固まってしまう。例えば「どんなリビングが希望？」とは聞かず、「どういった場所が落ち着きますか？」といった感じ。その抽象的に聞いたものを具体的な形(設計)で返

すキャッチボールを繰り返す。

敷地確認はヒアリング前に先入観のない状態で行う。できるだけ客観的に、周囲の環境や景色、場所イメージを把握する。ヒアリング後は施主家族を想像し、“お施主様らしさ”と可能性を考える。

設計ヒアリングより1~2ヵ月をかけ、ファーストプラン作成を行う。生活動線を大切に、平面プランというより立体的イメージで全体構成を行う。ゆえに、プレゼン資料は模型を使用する。

ファーストプレゼンは1/100模型と平面スケッチ。模型にて、外観や平面プラン、周辺との関係性などを説明。その後、平面スケッチにて動線確認。最後に感想を聞き、模型と平面スケッチを持ち帰っていただく。中庭やスキップフロアなどを多く提案することもあり、できるだけ立体的にイメージ共有できるよう心掛けている。

土地探しからのスタート

弊社依頼者の特徴(?)とも思うのは、建設場所が決まっていない依頼が多いこと。約半数がこのパターン。契約後、建設地探しを始める。漠然とした打ち合わせになることもあるが、敷地から決定できるのは設計自由度も高くなる。希望生活スタイルを共有し、エリアを絞り込む。土地はご縁であり、すぐ見つかることもあれば、3年かかったなんて事例もある。一見ロスに見えるが、この時間がお客様とのより深い関係性をつくりだす。

設計で大切にしているのは、施主との信頼関係である。設計を手段として、交流を行い、お互いの関係性を深める。そのことが、よりよい設計実現につながる。そのために、できるだけ施主とたくさん話すようにしている。今後もお客様との楽しいコミュニケーションを大

切に、活動していきたいと思う。



ファーストプレゼン模型
1/100

筋書きのないドラマの始まり



井上雅宏

1994年早稲田大学卒業／1996年早稲田大学大学院修了

学生時代の転機

学生時代、建築を学びたいという思いは強くあったのだが、自由すぎる環境の中で、何をしてよいかわからず不完全燃焼の日々であった。学年が上がるにつれ、興味のある授業がいくつかできた。設計実習と設計製図、建築史の授業である。この3つについては度を超えて取り組み、それ以外はテストを受け忘れるレベルで、落第を覚悟した回数は数えられない。設計実習課題提出のために徹夜がデフォルトとなり、昼夜逆転し、より世の中と接点がなくなるというバランスの悪い人間であった。

かといって設計製図の成績が良かったかということでもない。考えすぎて全く案が進まず、提出の1週間前になり、自暴自棄になるという「建築学生あるあるダメ人間」の典型である。いつもの通り間に合わず遅れて課題提出しにいくとビハインドといってD評価がつく。石山修武先生から講評会で「おまえは生意気なんだからもっとちゃんとしたものを出さないとだめだ」と全否定され、さらし者状態となった時もあった。

ある日、渾身の力を込めて1ヵ月ビハインドし、厚みにしてA1、10cmくらいの大作をつくった（これもビハインドなわけだが…）。石山研究室に乗り込み、先生に個人的に講評してもらうことを目的にしていた。

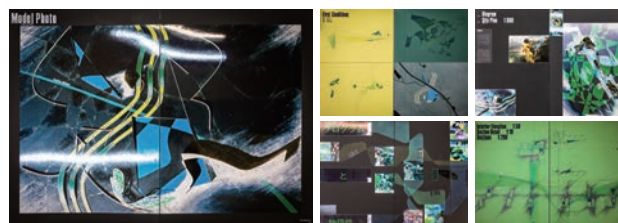
予想に反して、石山先生は、大勢の学生を前にしている時とは全く別人のように親身になって設計の方法論を教えてくれた。評価されるにはどうすればよいか、虎の巻を教えてくれたのである。不器用に課題に取り組んでいたからこそ、深く理解することができたのだろうが、そのとき抱いた石山先生への深い感謝の気持ちと尊敬の念は今でも変わらない。

卒業設計からの凋落

このころちょうど卒業設計に取りかかる時期であった。

理屈がわかったので、卒業設計の作業はこれまでと打って変わって、淀みなく進んだ。毎日ひらめきがあり、スピーディーにペンを走らせることができた。思いつくあらゆるイメージが圧倒的なものになり得る確信があり、感じたものがすなわち形となる不思議な経験をした。

提出後、学生数名が呼ばれ、村野賞を決める講評会が



卒業設計「高速輸送研究所—Program and Contextuality」

あった。自分は結局選外だったが、たまたま講評会の教授陣の前で石山先生は『「高速輸送研究所」というタイトルが良くなかった』と評した。そのタイトルは石山先生が考えてくれたタイトルだった。先生の手元を覗くと、僕の作品に村野賞〇が付いているのが見えた。

その後、JIA大学卒業設計コンクールで銀賞をいただいた。審査員の妹島和世さんは講評会で、この案は2等であるはずがない。1等であるべきで評価基準がおかしいと本気で怒り始め、審査員長と喧嘩する状況を目の当たりにした。こんなに幸せなことはなかった。また、就職の面接で1時間も遅刻したにもかかわらず、最初不機嫌であった伊東豊雄さんも作品を見た途端、僕が審査員長だったら君の案を一番にする、君を雇うことに決めたと言ってくれた。しかし、その衝撃的幸福体験は、その後の僕の人生を奈落に突き落とすこととなる。自分が、自分の作品に押し潰されてしまったのである。気がついたらプー太郎となり建築からは足を洗い、何年も歌舞伎町に入り浸る生活を経験する。（そこから私はまた建築の世界に戻ってくるのだが、その話はここでは割愛する）

JIA 神奈川卒業設計コンクール

先日、JIA神奈川卒業設計コンクールがあり、私は係員として撮影を担当していた。最後に審査員長の福島加津也さんが、金賞を取った女学生に「君にとってこのコンクールが将来の目標につながるものであれば全国大会でも挑戦しつづけるべきだけれども、そうでなければ別の選択肢もある」と問いかけた。何かを女学生に暗示したように聞こえた。彼女は幸せそうに「私は一番でいいんです。全国でも一番が取れるように頑張ります」と自信のある口調でかわいらしく答えた。卒業設計は建築を志す人にとっての筋書きのないドラマの始まりなんだと僕はそう感じた。

建築を楽しめる場を目指して

—建築学生のための情報番組

「相席教室」を始めました！—



学生の会 @joint
代表
長谷川理奈

2022年度新会員の募集を行いました！

今年度から正式に学生の会@jointのメンバー募集を呼びかけています。4月に3回にわたりオンライン説明会を行ったところ、新たにメンバーが増えました。昨年4月の時点では6人ほどしかいませんでしたが、ただいま30人を超えるまでに大きく成長し、大変嬉しい状況です。説明会は終わってしまいましたが、@jointでは通年メンバーを募集しています。JIA学生会員で入会希望の方や、学生の会にコンタクトをご希望の場合は、メールにてご連絡ください。(joint@jia-kanto.org)

現在の活動は、月に1度の定例会・交流会のみですが、今後活動の幅を広げていこうと考えています。@jointメンバー各々のやってみたいことなど、どんどんアイデアを共有し、これまで以上にみんなで盛り上げ、学生会員の横のつながりやJIAを通じた縦のつながりにより、学生の活動をもっと豊かなものにしていけるような「建築を楽しめる場」を目指していこうと思います。

また、この活動報告ページを通じて、読んでくださっている「大人」JIA正会員の皆様と、未熟ながらも大人の世界とつながりたい「学生」との間を取り持つ、きっかけとなることができれば幸いです。

メンバー募集に伴い、@jointのSNS (Facebook、Twitter、Instagram) も開設しました。今後の活動内容なども発信するつもりですので、もしよければフォローいただけると嬉しいです。今後も@jointをよろしくお願いいたします。

〈SNSアカウント〉

Facebook : @joint.JIA

Twitter : @joint_jia

Instagram : @joint.jia



新歓・オンライン説明会の
フライヤー

第1回「相席教室」を開催しました

年間を通じた活動として、悩める建築学生のための情報番組「相席教室」を開催することになりました。この情報番組は年4回を予定しており、毎回ゲストに今活躍されている建築家をお招きしてお話をうかがっていきます。

記念すべき第1回目は、6月26日に、横浜を舞台にしたワークショップやコンペの審査員などでも活躍されている、オンデザインパートナーズ代表取締役/東京理科大学准教授の西田司さんをお迎えし、オンラインで開催しました。

学生の視点からの建築家への質問・疑問を対話形式で行い、西田さんの建築に対する観点や設計方法、卒業設計に対するアドバイス等を学生にお話ししていただきました。

具体的には、設計する前段階の事例集めなどによるフレームのつくりにより、はじめてそのフレームの壊し方をスタディできるといった基盤づくりの話から、建築×〇〇といった建築を考える際の視点や、2040年の建築教育を考えた未来の話など、西田さんから見た建築について深堀



第1回「相席教室」の案内

していくことで、学生の建築に対する視点を増やすきっかけとなる会となりました。

また、この講演はJIAの学生会員だけでなく、一般の学生にもSNSやLUCHTAサイトで参加募集を行い、38名もの皆様にご応募いただきました。次回は9月を予定しています。

器の愉しみ

建築家は、趣味も仕事も充実した多趣味の人と、仕事に興味みたいになっている人と大きく二分されるように思います。仕事が趣味というほど建築を学んだ記憶はないのですが、いつの間にかそれに近い自分がいます。学生時代はスキーやバスケットボール、映画鑑賞など、いろいろと楽しんで過ごしてはいたのですが、今は、無趣味となってしまう自分がいることに気がつきました。

今回この執筆にあたって、どうしたものかと悩んでいたその時、ふと目に留まったのが、^{かなやまやき}金山焼の盃でした。

特に焼物が好きとか、精通しているわけではありませんが、時折、妻に連れられて展示会などを見に行くことがあり、その際によく分からないまま思わず器を購入してしまうことがあるのです。当初は、「たまに飲む日本酒くらいは少しこだわって飲むのも悪くないな」という安易な思いで購入したのですが、使っているうちになぜか器の向きが気になり、器に注がれたお酒の反射光やその奥に透けて見える陶器の表情など、いつの間に何度となく眺めている自分がいます。気分的なものかもしれませんが、そのお酒はとても美味しく感じるのです。次第に飲み物



1つずつ増えてきたお気に入りの器たち

に合わせて器を考えるようになり、飲みながら盛り付けた料理と器を眺める時間が心地よくなりました。今度は肴を並べるお皿も選びたくなってくるとは、不思議なものです。

青森には金山焼、^{うじょうやき}烏城焼などの焼物の他、津軽塗による漆器、そしてそれらの伝統技術を応用した現代作家の作など、素晴らしい器がまだまだ多くあるそうです。無趣味な自分にも、こうした日常の豊かさを愉しむ「ひといき」があることに、改めて気づく機会となりました。

(東北支部青森地域会 福士 譲)

心地よい秋

- 都心の美術館や展示巡りも良いけれど、田舎の山や水田の景色のあるところに行って伸び伸びと歩きたいです。(佐久間)
- 夏と冬は長いのに、秋や春は一瞬で終わるという印象がなぜかあります。残暑が厳しくても、9月からは秋！と思うことにします。(関本)
- 秋と言えば、JIA建築家大会。延期続きで3年ぶりの開催、コロナ禍に気を付けて久しぶりに満喫したい。(中澤)
- 8月末で事務所を立ち上げて12年となりました、少しでも時間を取って自然の中に身を置き、心を落ち着かせ内省しようと思う。(望月)
- とにかく「暑い〜」と顔をしかめていれば済む酷暑が過ぎ去って、秋の空気は心地よいのだけど、なぜか少し心細かったり。(会田)
- 今年の秋は、クーラーでキンキンに冷えた夏日の部屋を脱出し、秋の空気を感じながら外で過ごす時間を大切にしたいなと思います。(長谷川)

編集後記

- 酷暑や豪雨など異常気象と言われることが頻繁に起きていますが、最近「あつ森」のイベントで季節の移り変わりを感じています。(市村)
- なかなか減らない未読の積立本。もっと持てるかな!? 読書の時間。(竹内)
- 秋、子供の頃、近くの源氏所縁の2つの八幡宮のお祭りが楽しかったです。古社で森や林に囲まれた自然豊かなオアシスでした。(立石)
- 涼しくなったら地方への輪行サイクリングで自然を満喫しつつ、運動不足も解消したいです。(浅沼)
- 秋と言えば野外活動が気持ち良い、野球にゴルフそしてキャンプ。チタン製の道具を携えて全力で楽しみます。(知見)
- 近頃の秋はひどく恥ずかしがり屋なようで、自らは行かないと顔を出してくれません…。今年は兼六園にでも赴いてひと目会ってきます！(井筒)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長 : 市村宏文
副委員長 : 中澤克秀
委員 : 会田友朗・望月厚司・関本竜太・伊藤立平・竹内祐一・佐久間達也・長谷川理奈
編集長 : 望月厚司
副編集長 : 関本竜太・佐久間達也
編集ワーキングメンバー : 広報委員・吉田満・小倉直幸・井筒悠斗・知見徹摩・立石博巳
編集・制作 : 南風舎

Bulletin 293 2022 秋号
発行日 : 令和4年9月15日
発行人 : 大西摩弥
発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館
Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
印刷 : 株式会社 コラボ (旧社名 : 株式会社 協進印刷)
■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
・ (公社) 日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>
・ JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2022

自動ドアに安全をプラス。 防護柵「セフティウォール」シリーズ

自動ドア用防護柵「セフティウォール」シリーズに新たに3タイプがラインアップ！

NEW



角がないフラットなフレーム
セフティウォールC

NEW



左右のフレームで景観を損なわない
セフティウォールM

NEW



角を丸くしたアルミフレーム
セフティウォールEvery R

防護柵の
詳細な内容は
こちらから



自  動

通行者の「安全」「安心」「快適」のために。

ムダ開きを減らし、快適な室内環境をお届けする自動ドア

ドアを通る人、通らない人を自動ドア自身が判断！

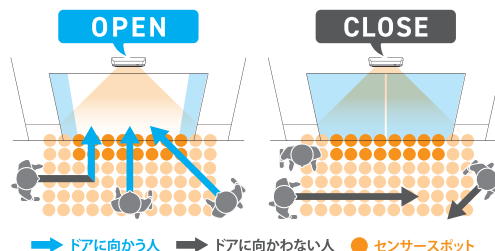


ドアを
横切る人には
開かない

NATRUS⁺e



ナトラス プラスイー <JIS安全規格対応※>



※起動検出範囲に関して独自の方策を採用することで、JIS A 4722相当の安全性を有することを確認しています。JIS対応自動ドアとしてご使用いただくにあたっては、適切な安全方策の実施が必要となります。



ナブコシステム株式会社

ナブコシステム

検索

本社：東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビルディング32階

お問い合わせ

TEL.03-3593-0181